毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治二十九年七月廿五日發兌



第八拾貳號

德富猪一郎著

國民叢書

第十册

經世小策

上卷 定價二十錢 郵税四錢

下卷 仝上

蘇峰氏が國民叢書、發刊すると茲に九冊。曰く進歩乎退歩乎。曰く人物管見。曰く青年と教育。曰く靜思餘錄第一第二。曰く文學斷片。曰く天然と人。曰く風雲漫錄。曰く家庭小訓。然れども是れ未だ蘇峰氏を盡さゞるなり。蘇峰氏の志は經世にあり。故に經世論を讀まざれば、到底蘇峰の本領は分らざる也。本書は、國民之友發行以來、現今に至る迄、專ら經世に關する論文を纂輯したるものにして、政治論あり。社會論あり。經濟論あり。外交論あり。教育論あり。道德論あり。尊王論あり。家制論あり。其他苟も廣義に於て「經世」と名づけ得べき論策は大概網羅せざるは莫し。中には「多年搆思の餘に成る」と、自ら言明したる程のものもあれば、其心血の灑ぐ所、論の卓、文の精、復た平生に非ざる者あらん歟。江湖有志の人、それ一本を具へて可也。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

宮中御用全世界白粉之大王

有効無害

牡丹精(ぼたんせい)

●牡丹精 は固有白粉と大に異り專ら皮膚の衛生に注目し西洋白粉を「ヘチマ」の水にてさらし對香龍腦其他皮膚に特効を有する二四の藥劑にて製したる帝國未曾有の藥白粉也

●牡丹精 は面部の肌理を軟密に潤澤にならしめ皮膚に光澤を顯はし、「ない」、「にきび」、「あせも」、顏の「あれ」、「ふきで」等によく且發する事なく眞の白色美人となる妙なり

●牡丹精:は宮中の御用を添ふし第四回内國勸業博覽會に於て褒賞拜受の榮を添ふし且つ内務省衛生試驗所に於て御試驗濟となりたる古今無比の藥白粉なり試に左に一二の例を掲げ參考に供す乃て本品の有効無害にして品位卓絶なるを知られよ



牡丹精を用ゆる人

水製 煉製

水製		煉製	
特製御用品	七十五錢	極大瓶	二十五錢
甲號極大瓶	三十五錢	大瓶	十五錢
同 大瓶	十五錢	中瓶	十錢
同 小瓶	七錢五厘	小瓶	七錢五厘
乙號大瓶	十錢		
同 小瓶	五錢		



普通白粉を用ゆる人

褒賞

牡丹精を第四回内國勸業博覽會へ出品せし所數多の出品中特に褒賞拜受の榮を添ふす

御用

牡丹精を第三回貴婦人慈善會へ寄贈せし所高貴の御買上げの榮を添ふし爾來御用品となれり

牡丹精を内務省衛生試驗所へ差出し定質分析衛生上害否の鑑定を願ひしに左表の如く好成績を得たり

檢查報告

東京市日本橋區横山町二丁目十三番地 依頼人 花王堂

第二百五號

化粧用水白粉(牡丹精) 一種

衛生上害否鑑定

本品ハ佳香ヲ有スル白色ノ合劑ニシテ之カ定質分析ヲ施行スルニ依頼人ヨリ見品ニ添テ出タル製法書ニ記載スル如ク舶來の粉○○○○○○○○湿更謨○○○撒里矢爾酸、剛酸、麝香、樟腦、薔薇油、阿里設林○○○○ヲ以テ製シタル物ニシテ其ノ他ニ有害物ヲ夾雜セザルヲ以テ衛生上無害品ナリトス

東京衛生試驗所所長

衛生試驗所技師 中濱東一郎 ㊞

明治廿四年八月 檢查主任

衛生試驗所技手 平野猪之助 ㊞

但し本表中○○の部分は秘密を要する藥品に付詳出せす

●製造發賣元 東京横山町二丁目 田中花王堂

關西代理店 大阪博勞町二丁目 玉村甚兵衛

大阪佐野屋橋 脇田盛眞堂

取次 全國至ル所和洋小間物店賣藥店ニ御坐候若シ無キ時ハ定價ノ外ニ郵送料六錢ヲ要ス

少年傳記叢書號外

吉田松陰文

定價拾五錢　郵税二錢

松陰の詩文に批評を加へて編輯したるもの則『松陰文』なり。松陰の詩文は、松陰の自叙傳なり。論策なり。寫眞なり。維新革命家の紀念碑なり。本社曩に『吉田松陰』を發兌す。而して今『松陰文』を發兌す。併せ讀む者は彼を知ること完し。

◎東京朝日評　少年傳記叢書號外として出づ、松陰の詩文を録するに漫遊、踏海、論策、交友、村塾、家庭、最後、雜編の八項に分ち猶ほ松陰の略傳を附す、是等の書は大に觀感興起の功あらしむるものとす

◎早稻田文學評　少年傳記叢書の號外にして卷首に松陰の小傳を附したる、松陰の詩文集なり、漫遊、踏海、論策、交友、村塾、家庭、最後、雜編等に分かちて、詩あり、歌あり、論策あり、書牘あり、すべて憂國の文字にあらざるはなし、交友、最後等の部に收めたるもの最も味あるに似たり、消夏の好讀本として、志士文人の坐右に具ふるに足る

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

新刊

第七 國民小說

定價十五錢　郵税四錢

新聞「日本」の批評に曰く『第七國民小說、民友社發行、國民小說は追々價値を落すなり本卷の如き更に讀むべきものなし徒に頭の數多きのみ』「每日」は曰く思軒居士の『寛政世界環航者』は例の森嚴なる筆鋒を以て面白き史談を書したれば愛讀するに堪へたり、櫻痴居士の『義經仁義主汗』の兎も角も老練なる、眉山の『うらおもて』が一時文壇の小波瀾を捲かしめたる、嵯峨之屋の『嫁形氣』『この馬鹿』の情致流動せる、松葉子の『脫營兵』湖處子の『自然兒』など面白く華やかなる作競集せらる、蘆花生の『恐ろしき一夜』は吾人が今に於て初めて讀みたるものなるが筆鋒熱血迸り愛誦すべき好短篇なり

一貶一褒、發兌者其當否を知らず、眞の價値は眞の讀者の淸判を以て決せん。粗讀者は粗批判者也、讀まざる妨げず。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

明治廿九年七月廿五日發行

家庭雜誌第八拾貳號

目錄



家庭雜誌第八拾貳號
（明治廿九年七月廿五日發兌）

社說

料理學校

日清戰爭の際、山東滿州に遠征したる軍人軍屬は、征戰中の事とて、非常なる疲勞をなしたるは言ふまでもなく、祁寒暑雨を冒し、甚しく憔悴したるべしと思ひきや、勿論憔悴したるもなからず疲勞したるもなからざれども、思ひの外に肥りて歸りたるは人の驚きし所なりき。

そは何故なりし乎を尋ぬるに、其軀力を增したるの重なる原因は實に肉食に在りたりし也。歐米人が日本人より長大なることは、人の知る所なるのみならず、支那人と雖其個人としての軀力が一般に日本人に勝りたるものありしは征戰中に人々が目睹したる所の如し。此等は勿論種々の原因より來るとはいへ、其食物に關係するもの意外に大なるべきことは、竟に疑ふべからざるに似たり。

然るに食物は何人も日に三回づゝ之を繰返すこと故、知らず識らずの中幾多の研究を重ね、自覺せざるながらもそれ〳〵適當のものを擇び取り居らざるにあらずと雖も、亦餘りに日常の事なるを以て、經驗慣習を其儘用ゐて之が改良に留意せざるの弊も自ら少なからざるべし。

斯くては國民を改良する所以にあらず。日本人種をして世界の優等人種として、能く其繁榮を無窮ならしめんには、更に爲す所なかるべからず。食物の改良と共に、料理法の研究、豈必要ならずとせんや。

勿論各種の女學校に於ては、現に料理科ありて多少調食の法を敎へざるにあらざれども、其多くは不完全に

して、纔に日常の調食術を授くるに過ぎず。因て以て食物の改良を謀る如きは決して望む能はざる也。是に於て乎、吾人は寧ろ特に料理學校の設立を望まざるを得ず。

所謂料理學校とは、必ずしも料理人を作るのみを目的とせず、一般婦人の研習すべきものとして、人躰の組織、生理衛生學の一斑、各種飲食物の成分及び其製造法の梗概より、穀食肉食各飲料の調理配合術、其人躰との關係、分量、効用、比較、並に飲食に關する禮節の一斑等を敎へ、以て食物改良の途に就かしめんことを期するに在る也。

而して其學期の如き、或は五月三月にても可なるべく、或は一種の研究會として之を研修するも不可なかるべきのみならず、其學の弘擴の爲には、裁縫術を兼ね授け、以て同時に衣服の改良を謀るも亦面白からずや。之を要するに其手段方法の如きは吾人必ずしも之に關渉せざる也。吾人は唯世上幾多の遊藝學校あるに係らず、此種の實用學科にして猶未だ十分に研修せられざるものあるを見、深く國民の爲に其不注意を惜むのみ。

産後の養生

古來より傳ばる産後の養生は

◎七夜の内は生肴を愼むべし◎隙間の風に當るべからず◎泣き悲むべからず◎驚き怖るべからず◎二七夜は床を離るべからず◎熱あらばいつまでも腰湯をつかふべからず◎過度の精神を勞すべからず◎飽食することなく亦饑餓することなく中庸をとるべし◎早く髮を洗ひ又梳るべからず◎早く行水をつかひ又は手足を洗ふべからず◎早く爪を切るべからず◎風に久しく居るべからず◎未だ身体の恢復せぬ内、遠行又は力役すべからず◎七夜の内楊枝をつかふべからず等

其他は皆人の知れるところ

實談

わしんとんの妻（三）

中野三鷹子

戰爭と流行病とは前世如何なる深き緣のあるものに

や、必ず兩者伴なはざるなし、或はチブス又はコレラ等たとへば影の形に從ふが如き、古往今來萬國の戰史に照して明かなり。(近くは日清戰爭がよき證なり)玆に英米の戰爭將さに開かれんとするや、天然痘いとも激しく流行して、大いに市人農夫を苦しめ、進んでは百萬の敵をも入れじと用意をさ〱怠りなき、同盟軍隊の營所を襲へり、目に見ゆる敵なりせば如何なるものと雖ども何なく是を拂ひ得べし、されども形なき病といふ大敵には銃砲劍戟其功なく、是が爲に惱まさるゝもの今や量り數ふべからざるまでに至れり。

恰もよし此頃はゼンナー種痘の法を發明せし折なりければ、其法によりて此難を免かれしものも亦少なからず、然れども其多數の人々は、種々の迷信に陷いりて此良法を用ゐず、牛痘を身に種れば直ちに牛になるべしなどゝ實笑ふべきことを誠として大いに種痘を忌の風あり、就中軍中にはかゝる說をなすもの、多くして、衆望ワシントンの如き、これを說くも亦其功なく、日每に患者の數を益せり、玆に於て夫人は何となく心すゝまねども(夫人も亦迷信者の一人なり)頑固者を首肯しむるの方便と勘念して自からフヒラデルフィヤの町にゆき、或醫師について種痘なし、營に來りてこれを衆に示し、我身を手本として百方彼等をすゝめしかばいづれも大いに是れに伏し、我遲れじと種痘なし、是より大いに其蔓延の度を減ぜり。

かくて此年も暮、明くれば一千七百七十六年なり、戰爭の機いよ〱熟し、人氣ます〱揚りしかば、其七月の四日を期して、獨立の擧を世界萬國に宣言せり、午後四時を以て式を擧げんと前以て定められしに、いづれも開國以來の最大事、其盛擧を覩ずにあらんやとて、我後れじと朝まだきよりつめかけ押かけ、今や〱と相圖の鐘の鳴るを待てり、頓て時いたりければ相圖の鐘は鳴渡れり、殆んど二時間の長きにわたりて

止むことなく、群衆歡呼の聲裡に響けり、此鐘のひゞきこそ年來の束縛を全く脱して、玆に人世のユトピヤ《ユトピヤとは自主自由といふ事をかりに一國の形にあらはしたる理想的の邦なり、もとよりかゝる國あるにあらず、猶天堂極樂といふがごとし、四五百年前の英國人トーマスモアといふ學者の筆の先より出でし處なり》を建設すてふ事を世界萬國の前に誓ひしあかしにして、米國全州の義氣の聲なり、《此時に發布せし宣言書は大抵の米國史必らず其卷尾に載たり、諸子志ざしあればついて讀むべし、中々に面白し》

此時に相圖を傳へし鐘は固英國より持來りたるものにして、全州の隅々まで、且又住民のいづれにも汝自由てふ事をつたへよ、必ず〳〵漏るゝことなく凡てに傳へよと銘のありしこそ可笑けれ、是其識をなせしともいふべきものか。

堂々たる式を擧て獨立の擧を世界に誓ひ、萬國の人々はいづれも皆こゝに眼を注ぐ、いかで女々敷事のなるべき、功ならんか倶に其樂を樂しむべし、事破れんか倶に其苦を別つべしと義氣は金石にましてかたきも如何せん、貧に乏しく軍隊は皆いづれも是に苦しみ或ひは一杯の酒、一片の肉もなくして暑き永き夏の日に曝され、又は一枚の破毛氈さへもなくして寒き冬の夜を明せし辛苦の程は中々に筆も及はず、言も足らず、全軍殆んど一週間に渡る斷食の難にあひし事さへもありしと聞く、此危運に際して士氣の依然として變ぜざりしは、ワシントンの衆望と同盟の人々の決心によるとはいへども亦婦人隊慰勞の力决して少なきにあらざるなり。

ワシントン夫人は多くの婦人を集めて一隊を組織し、ワシントンが同盟軍隊にありて總督たるが如く自から此婦人隊の頭となりて群下を指揮し、衣服の事、食料の事など《固より軍隊にも其職にあたるものあれども》

をはじめ、看護のことより、出役者の留守宅の事などに力を盡し、絶えず軍中に往來して陰に陽に莫大なる助を與へたり、まさに萎靡せんとせる全軍の勇氣は是等やさしき婦人隊のなぐさめによりて常に其餘勇を恢復せり。

就中尤も記臆すべきは是等婦人隊の時として傳令の任にあたりしことなり、密書を其衣襟に縫込で隊より隊に是を傳ふ、誠に勇敢の擧動六尺の男子顔色なし、流石の英兵も初の程は是に氣づかざりしが、遂には是を悟り其毒手に倒れしものも亦少からず、然して夫人も亦屢々此危險の任に當りし事あり。

されば夫人は、軍始まりてより後は多くの時を營中に費やし、餘り家に歸らざりし、其留守中は家事一切を養女カルバートこそ掌れり。

夫人此養女(ジョンの妻なり)に書を贈り告げていふ、營中に於ける總督の部屋は誠にせまく、時々見舞われに席を許さぬ程なり、食物とては更によき物のあるなく、時としてはたゞ〳〵臭き鹽豚の一片に永き日を志のぐ事あり、されども物の欠乏は是等をさへもいと尊とからしむと、其狀思ひやるべきなり。

陽氣いたる處金石も亦とほる、資に乏しき同盟の軍隊の決心は誠に千曳の岩よりも重く、資に富る英兵も亦是を如何ともするに難くや、其勢にひるみし折しも、かてゝ加へて義に富める佛人の一隊(ラヘートのひきふる處なり)來りて是を助くるありしかば、いよ〳〵旗色のよくなり行くにつけて、婦人隊は少しく其閑を得て一旦其家に歸れり、されば夫人もベルノン山の麓にかへりて其家事を司さどり、功なりてワシントンの歸らん時を待居たり。

時は今十月の半なりけり、夫人をはじめ家族一同各々いうげを終へて樣々と打かたらひ居たりける折ふし、ワシントン突然として歸り來れり、夫人をはじめいづ

れも其思がけなきに且つ驚き且喜こび、いそ〳〵として出迎へり、殊に嬉々として出迎へしは四人の孫なり、《ワシントンも今は早よきおい樣となり了せり是ジヨンの妻カルパートの生みし處、いづれも皆其不在中に出來し事とて今初めて是を見たり》前後にからまりて其歸り來りし事を喜ぶ、何ぞ知らん老爺は彼等が爲に尤とも悲しき事を齎らしかへりたることを。

夫人は先其戰爭の進を問ふ、近くして落着すべし、最早充分の好結果は見えすいたり、ともに〳〵喜ぶべし、されども其喜と共に尤も悲き事の御身に告げざるべからざるあり、聞きつれば如何に悲まんと告げぬさきより吾胸のまづ碎くる樣なり、ジヨン《今は軍中にありてワシントンを助く》こそすぎし日より悪き熱病に犯されていと危ふし、されば英兵鋒を倒して吾事たとひなるとても同時にジヨンも亦去るべし、と傳へしかば夫人もカルパートも殊の外に是をかなしみ、直ちに馬車をかりて彼處に赴むき、其病床に近づき見れば、ジヨンはいまだ死せでありけり、慈愛なる母と最愛の妻との顏を見ていとも〳〵滿足氣にいとまをつげて打ほゝゑみ、青年わづかに二十八の齡を以て彼は逝けり、嗚呼人世の多端悲喜こも〴〵到るの樣はそも〳〵斯の如きかや。

ワシントンは泣悲める妻と養女とを慰めて、ジヨンが葬送の式を行なひ、事はてゝ後彼等に別れ自からは進んでラフヘートの隊と連合し、コンウオーリースに於て英兵と戰へり。

此コンウオーリースこそ、實に英兵最後の舞臺なり、此地にして破れざればいまだ望みなきにあらず、されども此地に於て破れ同盟軍勝を制せば、米國の獨立は全たく此時を以て定まるべし、故に敵も味方も皆諸共に充分の勇を奮ふて戰かへり。

或日の事なりけり、一人の騎兵あり駿足に白泡をはま

せてフヒラデルフヒヤの町に入る、市人いづれも皆是を見て其何の爲に來りしかを疑がふ、暫くして騎兵町の四辻に達するや、聲はりあげて叫びたり、今日の午前二時コンウオリースを占領せり、英兵は悉く破れたりと、聞き居たる群衆は歡呼の聲を以て是に和し、言ひつたへ、語りつたへ、全市さながらに鼎の沸騰せるが如く、喜こび極まりて死せしものさへありしといふ、騎兵はます／＼あがきをはやめ傳へ／＼馳せ去れり。」されば日ならず全州いづれの津々浦々にまでも傳はり、市街村落の戸々或ひは祝杯を上げて、或ひは凱歌を奏して其事の全成を壽げり。

勝て兜の緒をしめるとは古來良將のたしなむ處なり、ワシントンは勝つていよ／＼群下を制し、呉々も驕つては九仭の功を一簣にかくべしぞとて、用意をさ／＼怠ることなく、ニユーベルグといへる地に於て次に來らん戰爭の準備をなしけり。

然るに英國の政府は宰相ノース卿をはじめ、一同いづれも皆其望なしと觀念めて直ちに事をやむべしと決したり。

玆に於て英米の全權委員は佛都パリスに相會して平和條約を結たり、是實其年の四月十九日にして今にいたるまで尤とも尊とき紀念の日なり、次いで英國の軍隊派して此地にあるものは其十一月を期して殘らず引上げ、十二月を以て同盟軍も亦解隊し、こゝにワシントンは其職を辭して故郷ベルノン山の麓に歸れり。

雙鸞其棲を異にすること玆に數年、時に相逢も國事の爲に制されて、樂しき日とてもなかりしと、是より又又初めの如く温かき家庭の樂を倶にせんとせる其喜びや如何なりけん、實にたとふるに物もなし。

微々たる同盟の軍隊を以て、勇氣全歐を飲める英兵に對ひ、辛苦艱難、百折撓まず、遂に其功を成しけること如何に世界萬國の人を驚ろかしたりけん、各々使を

馳せて是を祝し、種々樣々の贈物などは續々としてひきもきらず、就中獨逸のフレデリック大王は、世界に於ける最老たる將軍より世界に於ける最大なる將軍に贈るてふ鄭重なる頌功の書を添へて美を盡したる贈物を贈り玉へり、又佛國の將官は相謀りて立派なる陶器の家具紀念の章を描けるものを夫人に贈れり、其他一々に記さんは筆の及ぶところにあらず。

戰場にありて衆望他に超へたるワシントンはこゝに再び推戴されて平和の世に立ち、任期二回、前後併せて凡て八年の間、善良なる大統領として國に臨めり、ワイトハウスの裡にありて百事其夫を輔け、間接に米國全洲に與へたりける夫人の功、史籍明細につたへずといへども、決して少々ならざるべし。

かくて一千七百九十七年の三月九日任いよ〳〵滿ければワシントンは夫人をはじめ凡て七人の家族と倶にワイトハウス（大統領の役宅なり）を出で、馬車を驅りて、戀しきもとの住居に還り、茲に純然たる田舍紳士の風に歸し、悠々自適餘年を送れり。

誠に善良なる明妻君、完然なる婦女の鑑と米國の人は語れり、其詳傳あまさゞらんと欲するときは大冊二三にも必らずや及ばん、こゝに傳ふるはそが九牛の一毛にして實に傳記中ところ〴〵の拔萃なり、されば自つから其順序も錯雜し、解し難きところもあるべし、讀者幸はひに是をゆるせ。（完）

家庭雜誌第七十三號に載せつる
烈女せんの不幸を思ひやりて　（長の舍主人寄）

學海翁女　依田柳枝子

ひさり子がみ國の爲にたなれぬさきゝし心よいかにかありけむ　八太光子

いかばかり小萩が上にかゝりけむにはのなしへの言の葉のつゆ　八太八代子

國のためちりし小萩はゝそはの敎への露のふかくやありけむ　島了子

國のためふみの國べさきたちし夫子思へばいかにかあるらむ　寺野章子

數へまし〻きみの操にひさり子もみくにの爲に身をはすてけむ　乘竹呂久子

なつかしき心をこめてさきいてしゆりの色香のいまそ知らゝる

文藝

五月雨（下）

朧の舍女史

深窓の中に養はれ何一ッ心にかなわぬ事も無く花にうかれ月を愛て明し暮す身なりとも一朝世の變遷に逢てうき世の荒き浪間に投込まるゝ事あらば如何で防がんの心一ッに犯しがたき決心も出來て雪折れ知らぬなよ竹の操を杖に春の榮を待ち渡る事易かるべしましてや左迄とめると云ふ程にもあらぬ身の中空なる程にて世のうきを知り初めたる者のなどてかくねりたる一節の附かざらめやは獨娘とて母の甘やかすにも係らず溫順さ利口さと伯父叔母が蔭口に何時もほめられし幸子十歳と云ふ年に母に死別れ初めて世のわぢき無きを感じ自然と陰氣に流れし心花のちり月の缺るを見ても沈みゆく計なるをそれしやの果なる後の母とは意見あはず面は靜に見ゆれども互の心の底いつも小波立さわぎて長閑けき折は非ざりき弟妹など多くなり行まゝもとよりつながぬ舟のいよ〱岸邊離れて此方にゆられ彼方に漂ひてはてし無き荒海にもまれ〱し末の心我ながら疎ましと思ふ折もあり廣き世間に誰一人胸にたゝまる辛さ悲しさを打明くる人もなく聞て呉る人もなしと我から捨てし年をへて神の結びし緣の糸つながるまゝに嫁入てよりは良人一人を杖とも柱とも賴みて一年餘の年月を春の海の浪靜かに明し暮せしに良人が諸縣へ出張のすこし前より何と無くなやましく留守中も臥がちにて食物の樣子醫師も妊身ならんと云ふに苦しき中にも嬉く良人の歸宅せば早く聞せて欣ばせんと待ちし甲斐無く歸宅早々覺へ無きうき名故の離緣沙汰高峯に咲ける花を見て樂つきぬ其折に日蔭も見へぬ千仭の谷の底へ蹴落されしが如く又と再世に出立ん氣力も

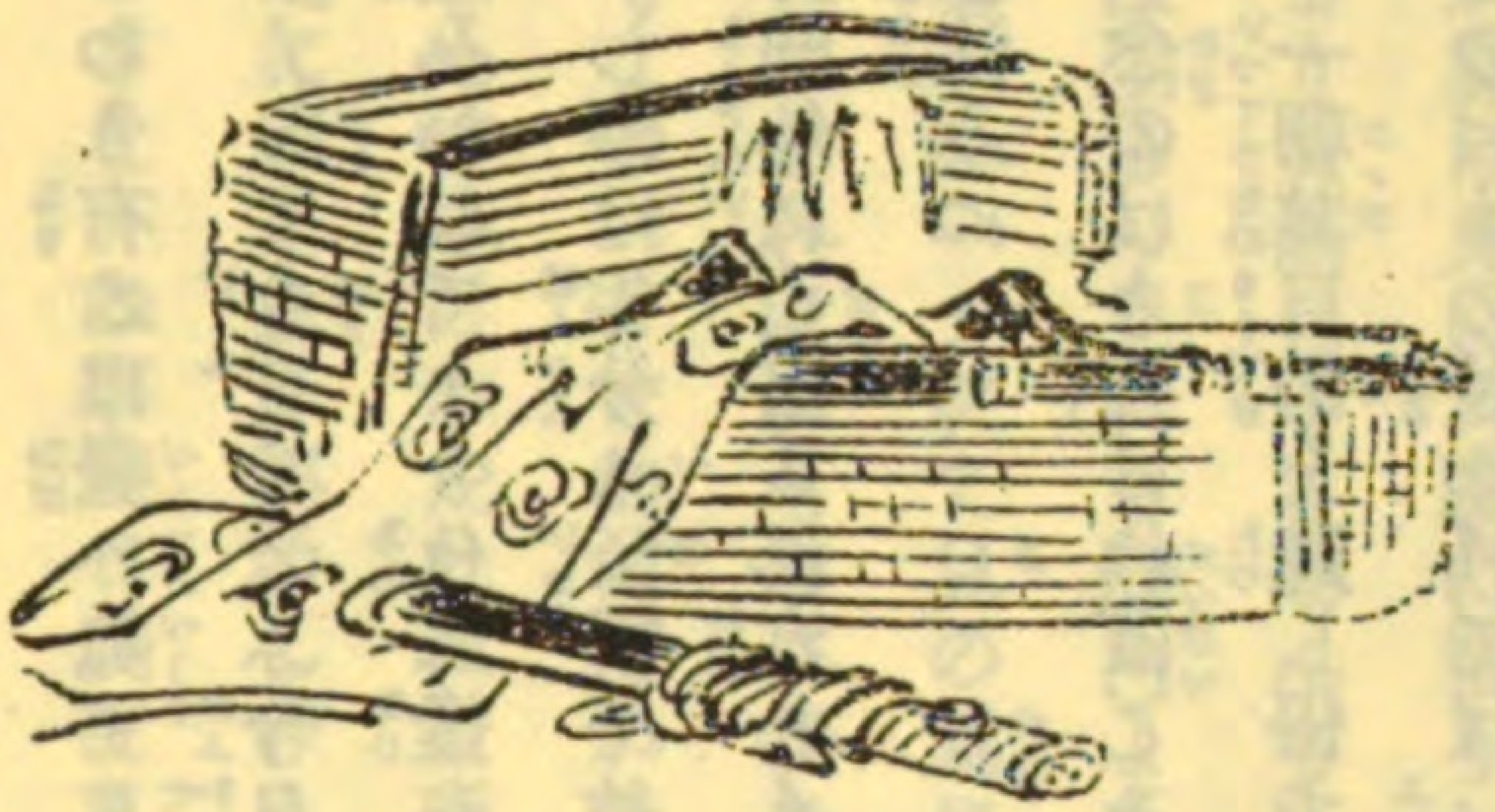
失せ乳母が家をば暫時のやどり無念の涙に明し暮し心一ツを定め兼つ覺無きぬれ衣に名を朽させせんも口惜しけれど何事も是迄の運とあきらめて人目に掛らぬ岩蔭にうき世をよそに見んか我が身は兎に角腹に宿りし兒は罪も報ひも無き者を生るゝより父無し子とせんもいとおし母がぬれ衣ほしあへねば生るゝ兒にも胎内より消へぬ汚名はつきまとわん我身が心一ツにて兒の爲には無慈悲なる鬼ともならん男にもあれ女にもあれ我身が爲には命とも玉とも黄金ともなるべきぞ如何でか此まゝ止まらんや必ず汚名を雪がんと心はやたけにはやれども元よりのなやましき心地に添て思ふ事のしげき爲にや俄に出る大熱に人事をわきまへぬ事幾日幾夜乳母があつき看護に病は一ト月計にてやう〳〵いへたれど口惜や淺間しや母の病の其爲に胎なる兒はうせたりき落膽と恨怒に逼りし胸の内泣つくして早一滴の涙だに無し猛火を以てやかるゝが如くもだへに〳〵し末の心よし我とても膽はあり女の一念必ず仇を見出して汚名を雪ぎ彼ゆゑに失せし我兒の仇を報ゐんと住なれし都を出しは五年以前

恐ろしきは涙の後の女心とか我もはや恐ろしき者の内にや入らん仇の行きしと聞く北海道の函館、小樽は更なりすこしにても名の知れたる邑々里々探ずと云ふ事なけれど似たりと思ふ人にも逢はず元來樂の爲にする旅ならねば旅費ある間は足に任せては廻り旅費つくれば二月三月宿を出ず裁縫あみ物に身をゆだね其所より先への資を造り艱難と辛苦に年は積れど仇はなし北海道へ行と書置きしは我を欺く爲なりしか北へと云ひて西へや行けん南へか將東へか何地にもあれたとへ月日は十年經とも廿とせふとも此一念を遂ざらめや佐渡が島ねは陸地より遙はなれし所と聞くにもしや彼地にと思ひ出るまで少時なれども見馴れし北海道を後になし新潟港に着しは先月の中旬、名前は知らねど松井

と云ふ學校の敎師居ると偶々きゝしを賴み此郡に來てよく／＼聞けば口惜や似てもにつかぬ田舍人、失望につかれも强く覺ゆるまゝ息みし茶店の其前を通りし人は確に仇はやる心を押靜め姓名を問へば聞もしらぬ名妻子も在しと云ふ言葉にいつわり有とは覺へねどもしやに引れて此所に移りさぐり／＼て今日と云ふ今日必恨を報ゐんと思ひし事は空賴みかねてより仇に逢なばかく云はんかく恨みんと思ひし事は半分も云得で彼が急場をしのぐ腕立に敵し得で門外に引出され空しく歸りし無念さよと正躰も無く泣沈みぬ

恨をはらさんと思ひ込みし一念のはり强ければこそ艱難にもたへ危險をも犯したれ一朝其目的を達し得で失望のあまり今迄はりつめし心のはりの弛きれては再もどる女心の胸せまく思きわめし顏をあげ「目前に仇を置きながら是迄思こみし事仕遂ぬは殘念なれど何事も皆運なり立られしうき名も雪がで死ぬるも運彼ゆゑに亡せし我子の仇も報ゐで終るも天ならん何事も夢まぼろしと觀念し恨もせじ歎きもせじかくなるも皆前世の宿因此上は一時も早く息たへてうきも辛さも驚かさぬ苔の下に靜にねむらん事こそ願はしけれ」とつと立上り旅包より取出す一物「是は亡母上の守刀なりしを我身に給はりしもの是にて我玉の緖を絕たば母上の手にかゝるも同前なれば嬉けれど都に在ます父上のかく成る身ともしろしめさず明暮に歸り行く日を待ゐ給はんを思へば我身ほど不孝なる者はあらじ」と又も淚に曇り行く心をやう／＼取直し「今更云ふとも返らぬ繰言先立つ不孝はゆるさへたまへ」と鞘を拂らい稱名の聲共に我とわが咽元をさし貫かんとする折しも障子蹴放しかけ入りて利腕しかと押へ持ちたる白刄を取らんとする人あり誰なるやは見分け得ねど只取られじと爭そへども其人の力やまさりけん刄もぎとりどつかと坐す顏見てびっくり「ヤ、松井一雄……何しに……

先程さん〴〵耻かゝせ其にまだ飽足らでか此所まで來て刄物取つたは殺す氣かどうせ捨てる命ながら重なる恨ある人の手にはよも死なじ刄物かへせとつめよれば愁然として首をたれたる一雄はやをら居直りて「今となりては何と云はるゝとも辯解せん勇氣も無く又言葉も無し然れど懺悔には萬の罪も消ゆるとか聞けば松井一雄が懺悔の物語一通り聞給へ、其上にて如何やうにせらるゝとも些も恨む方なし」と眞心こめて云へども此方は踈虞せず「伴の爲に耻をも見、歎をも重ねたる身何事も皆伴と思ひをれば」と情なく云へ



ば「其御憤は御道理さら〳〵無理とは思はねど死を覺悟の上の事なれば決して伴は申まじ恥かしき事計なれど云はねば藤田と僞名の理由も分明るまじお察しの通り新聞に投書せしは小生なりもとより御身樣とは從弟同士幼き折の雛遊する程より何時と無く兆初たる戀の色折にふれ事問まゐらす文のはしに思の程をほの見すれど見知らぬふりの情なさを人づてならで怨みんと思へどいつも序無く空しく月日を送る内御身樣には畑へ輿入と聞たる時の我心腸寸斷〳〵にせらるゝやう覺へ悶へしてうつら〳〵と暮せしを母が心配の顏つきして問くるゝさへ腹立しく何かにつけて當りちらすに持あまし居りし有樣今思出せば勿躰無さに身を切らるゝやう覺ゆれど其折は何事も夢中唯殘念と云ふ如き思ひ胸にみち〳〵ぬ今ハはや主ある御身と斷念めんとすればいやましにまさる思に悶へしに計らず御身樣の實家へ來られし折に行合せはか無き事云ひしを腹立れてか

いつに無く強き言葉きくと其まゝ我家へはせ歸り己が非には氣も付かず人の無情の腹立しく思ひみだれし我心にはや悪魔の入替りけん何とかして此怨を報ゐんと待つ折から畑氏には諸縣へ出張せられ三月程は留守との事然らば其留守中にうき名立せて腹いせんと有ぬ事ども書しるし新聞紙に投書しぬ是にて怨は報ゐしもののさすが都に居るは後めたく北海道へ行との置手紙して飛出せしが元來何地をさしてと云ふにあらねど兎に角上野の停車塲に戻りしが朋友の郷里新潟へ行かんとするに會し同行をすゝめらるゝまゝ一ト先新潟迄赴く事とし其日の内に直江津迄は無事に着き其翌日新潟行の船に乗りぬ風は少しありたれど追風なれば氣にも止めずゐたるにふとした事より心安くなりし一紳士年まだ若き細君と幼き子供との三人づれ四方山の話に時を消す内彼は埼玉より轉任して新潟より遠らぬ郡に赴くとの事職務を問しに郡長と答へぬ任地には一人の知己なく知事の名さへ初めて聞くなればやはり元の埼玉がよしとて己が故郷でもあるかのやうに自慢話おかしく聞ながら船の行にまかす内追風なりしに何時か向風となりし上はげしき颶風と替りたれば乗込人は大に驚き騒ぎたれど何の甲斐無く益々吹つのる風に船は動揺はげしく甲板上は浪に浸せり一同生命ハはや無き者と斷念て運を天に任かす内船の新潟港に近づくと共に風威漸く減じぬ然れど浪は猶高かりき既にして港を認むる事を得し時は乗込人一同欣びの聲を發せり然れど此瞬間再度吹つのる風に驅られて船の急進すると共に非常なる響して暗礁に乗上たりもはや是迄なりと我を先にと海に飛入りぬ小生も傍に置きし小さき革包腰に結びつけ船躰の破片に取つきて浪の間に／＼漂ふ内氣息たへたるを救助の小舟に引上られぬ手厚き介抱に蘇生し追々氣力も復したれば厚く禮を述べたる上救助されしは我より外に幾人有やと問へば救助船の行やう遲かり

しかば助けたるは數人のみにて皆男子計と答へぬやがて枕元なる我と共に助かりし革包引よせ急ぎ開くに我が入れ置きし者と違へり訝しさに殘らず引出し見れば我物とては一ッも無く最後に出しは紙にて幾重とも包みたる一葉の辭令書なり外形の同き爲め混雜の折取ちがへし者なるべきも是は正しく古郷自慢の郡長殿のなりき我にありては無益の者なるをもし彼も救われしならば如何計か探ぬるならんと思ひかゝる人や助かりたるとくわしく人相など云へども似よりたる人も有らずとの答を聞し時いはや惡魔の入替りけん我心ながらも恐ろしき罪を犯しぬ辭令書の手に入りしこそ幸ひ我身藤田久政と名のりて御身樣の目をのがれ且つは榮達の基とせんと膽太くも我こそ新任郡長よと披露しぬもとより同船者は大方死亡して知る人無き上辭令書の有事ゆゑ一人の疑ふ人もなし然ど眞の藤田並に妻子の死躰を見ぬ內は安心ならずと最寄〳〵をたつねさせしに程へて見出せしとて運び來し母子の亡體、見さへすれば用なしとは思ひしものゝ是も一ッの計畧とつとめて作る愁傷顔理由知らぬ人々の悼詞云ふを聞くも何となく空恐しく七日〳〵の佛事も心に入れていとなむ內何時とも無く馴れ行きて我身松井なるやも忘れん事を願へり然れど心の靜まる折々は良心の責に堪かねせめては郡民の共益と事業に全力を注ぎてなり心の譴を免れんと心を盡す程に郡中の人誰一人蔭口云ふ者も無し天を欺き大罪を犯せる我身にも春去り夏來り秋と見冬と暮しつゝ思はず五年の月日を過せども我本名知りたる人もあらずましてや御身樣にめぐり逢はんとは思ひもよらぬ事なりき我本名を呼れし時今迄眠りし良心の醒ると共に我が罪惡の恐ろしく尋常に自白せんと決せし心を又もや被ふ村雲是迄に仕上りし業を捨る事は惜く今此所にて御身樣の云分を通さば我身の破滅何事も知らず〳〵で通すに如ずと思定めしに確なる證據まで持お

らるゝにぞ口先にては敵はねば腕力に訴へてなりとも一時を免れんと重ねて恥見せ申せし事今更思へば後悔の外なし然れど其時はまだ迷の夢の醒やらでいつその事御身様を亡き者にして我世を後やすく送らんと俄に起る殺意に是この通り短刀をかくし持て宿を出つ見へがくれに追ひ來て内の様子を覗ふと知らでや涙のひまに繰返さるゝは五年が間の艱難辛苦、皆我が爲と知るからに聞く事々に身にしみて我罪の恐ろしく御身様の操に比べてわが行の恥かしく五年以來の非をさとり迷の夢は醒はてぬ此上は潔く懺悔して後自殺せんと思ひ定めし折御身様の絶望のあまり自害せんとせらるるに驚きはせ入りて刄を奪ひ申せしなり我來歷は是迄なり今自殺せんは易けれど然しては御身様の辛勞も甲斐なからん生命は捨し覺悟なれば如何やうになりとも心ゆくやう成し給へ男子と生れし甲斐も無く親には不孝の罪を重ね罪無き御身様には不義の汚名を被らせ其上に公義をさへに欺きぬあな恐ろしの我罪惡よ」と後悔面に現はれて疊に落る數行の涙

默然として聞ゐたる幸子は首をたれたるまゝ無言なり彼がかゝる罪を犯せしも原因は我身なるに是が爲に公義を欺きし事のあらはれて六ッヶ敷沙汰とならば伯母様に申譯なし然ばとて此まゝ世に跡たへて覺無き汚名を雪ぎもあへで終らんは猶いや／＼愛しき我子を闇よりやみにやりたるは正しく彼と思へば怨めしと義理と恩愛の二タ筋に決しかね千々に心を碎くと知りてか一雄は首を上げ「何事を案じ給ふにや如何せ免れぬ罪惡ある身なれば此よし官に訴へ給へ然すれば我罪跡と共に御身様の曇りなき證據世にあらわれんいざとく／＼」と云へども幸子は猶無言にて眼を閉おりしがやありて「思がけ無きお物語伺いては何として訴へらるべき此やうなる罪を犯されしも其原因は皆我身なるを己が云分通して貴方のもし罪を得たまふ事あらば

伯母様に申譯なし」否々々今左様なる事云ひ居るべき時にはあらずたとへ御身様には免さるゝとも法律にてはのがれぬ罪ある身なるをいざ訴へ給へ」と云へど猶返事なければはつと身を起し「さらば是が今生のおいとまごひ折々は我母をかへりみ給へ」アナヤと幸子が止むる手をば拂らいのけ何方へかはや馳去りぬ

片想のくるしさに法律のゆるさぬ罪まで犯せし松井一雄は如何がしけん十數日後の新聞に雜誌に幸子の名はかゝげられて類無き烈女とまで稱へられぬ然れど畑武夫が家には幸子の影も見へざりき此後幾十年ふとも見る事なかるべし

呉竹の根岸の里に家居の様もなべてならず小女一人のわび住ゐ朝より出て日暮に歸る女主人年もまだ若き様子なるに何地へ行やらんと好奇にも彼小女に答へば女學校へ敎へに御出との事お家にお出なさつても誠に物静かで用事さへ無ければ口をおきゝ成さる事は無くお笑らい成さるを見た事の無いそれは〳〵は淋しいお方と答へぬ、はておやしと思ひ門邊を見れば小さき標札に墨色うすく新井幸子とかゝれぬ

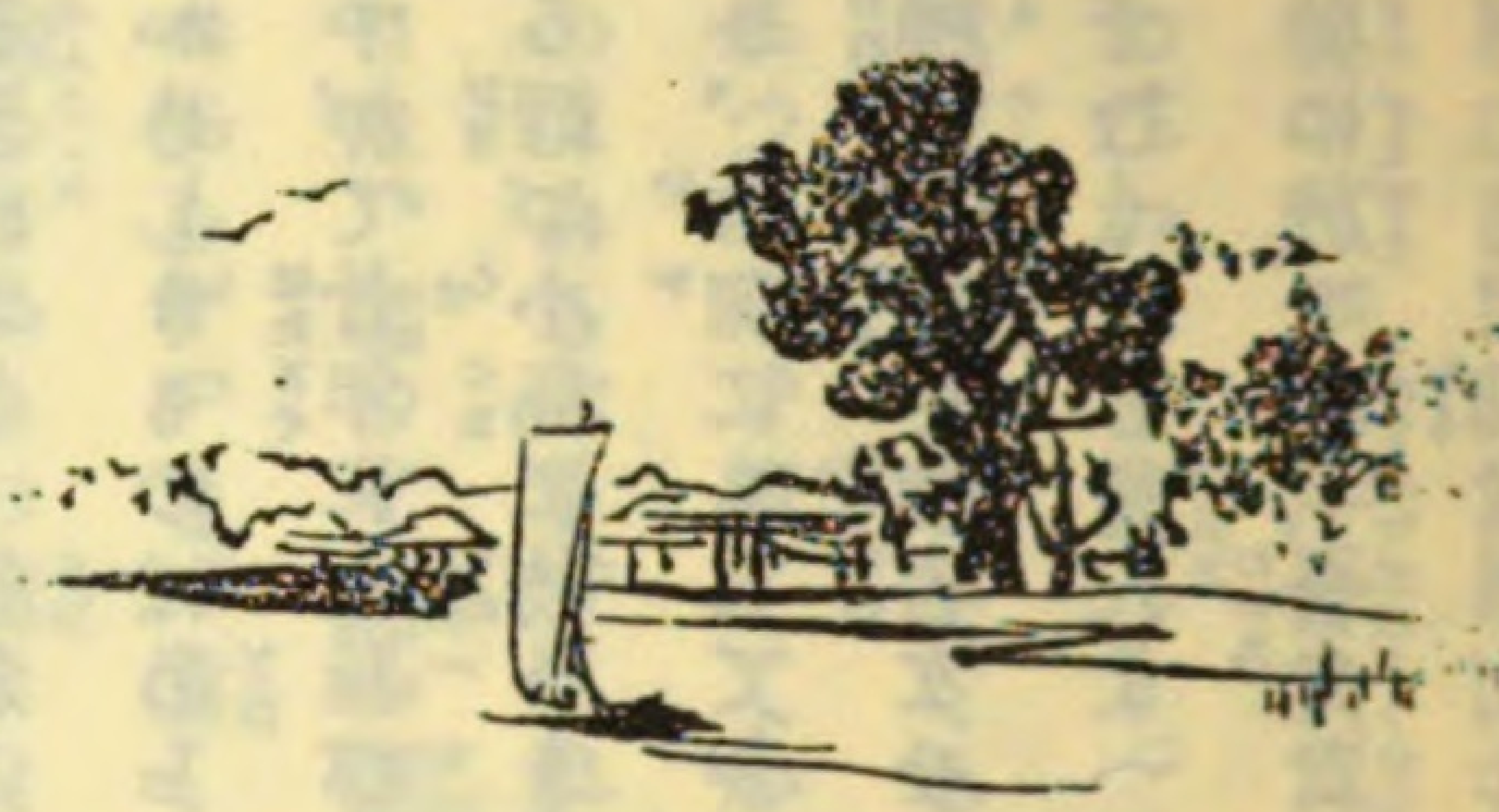
（完）

夏の川を見て

桐酒舍

此頃綾瀬の里に夏籠りせる友がり音づれしにあるじ喜びて出むかへていさたまへとて川にのぞめる釣殿にあなひしつゝいよすなかはまきて彼方此方志めさるゝまゝにと見れは實に〳〵夏はかよはぬ眺なりやみどりなす綾は青海波のそうそく織いたすにやとあやしまるゝ浪もみたさでいつたりむたりの童が藻の花かつぎつゝたゝはさもあらはれつべき岸の邊におよぎて宇治川に名を流したる昔つ人にもおとらじと思ひあかれるけしきのいとをかしければをしきにもれる桃の實とりて流しやるにいとゝけうかりて我さきに龍のあきとの玉

や得んときそひよるそいはけなくも大和心の末たのもしく見ゆるに桃太郎の物語もえのばれて



山河に
　流れし桃に
　　あらねども
　香くはしき名を
　　とりとめよ子ら

猶あかぬを共にいにしひとりかやゝ暮なむとうながすに我は月のみふねのうかび出なんも見むと思ひしものをとゑむしつゝまかてぬるをあるじにかはりてかへさてらすは芦間の露かはたほたるか

六代君（三）

其村子

急ぎに急ぎ、日ならず鎌倉に馳せつけて見れば、情なや源二位は、那須野が原へ御發足のあとにして、秩父千葉畠山なんどの人々も、皆扈從して誰一人とゝに殘らず、えばし御留守中の御政務は、御臺所政子の方に於て處理したまふとの事なれども、六代命乞の如き大事、いかで御取計らひのなるべきぞや、されば道いかに遠しといふとも、那須野が原に馳つけて、直々に源二位に逢まいらせで叶ふべからず、猶豫して日限空しく過ぐれば詮なしと、到着の草鞋の緒さへほどきもやらず、其まゝに又星月夜、鎌倉山を跡になし、那須野が原にむかひたまへり。

さしも廣き那須野が原の彼處此處、各々家の紋染出したる幕打張りて處せきまでに假屋をかまへ、上は有位高官の人々より、下は名もなき番卒のはしたに至るまで、心は一樣にして割符を合せたらんがごとく、いづれも〳〵人には負けじ、我劣らじと手なみを一張の弓に誓ひ、功を一口の野太刀にかく、されば曉の露に伏

す、草押わけて野兎を追ひ、夕月の影に覺束なくも鹿のあとをたどり、日は日もすがら割竹の音矢叫の聲をたやさず、夜は夜もすがら火串篝火のかげを消さず、獲物は積んで山を築き、功名帳は冊を重ねて祐筆の人人さらに休むべきひまだになし、誠に／＼治に居て亂を忘れざる、狩倉の御催しばかり世に美々敷も亦、いかめしきものはあらず、數ふれば今は早十年にあまり、やがて廿年にも及びたんずる昔なりけり、さゝやかなる蛭が小島に物うき月日を送りむかへける當年の思ひ、如何にもして伊豆一ヶ國の主となり、情なくも吾種千鶴丸を殺害なせし、惡き伊藤の入道に、心ゆくまでむくはしめたまへよと、氏の神に祈まいらせつる其時に於ては、吾身ながらかくまでも功成就の身となるべしとは思はざりし處なり、さるを天運のこゝに再たび運り來て今や日本の武將とあふがれぬること、もとよりも今の世に顯はれたりける祖先の餘慶とはいふものゝ、第一は懷中の窮鳥を助けたる、恩の程こそたくらべんものなきまでに莫大なりと、懷舊の御思につれてはいよ／＼深くなりまさる御心の色自づから穗にあらはれて、北條一門の御用ひ殊に篤く、何事によらず、萬うちまかせ給ふ遠州上洛のあとは、そが名代として子息北條相摸守義時、御前に伺候していとうや／＼敷、辭をたゞし、何事にやありけん、都高雄山の御坊文覺上人、懇願の儀ありて鎌倉に下向の處、折しも武將此處にましますと聞き、又候取ものも取あへで彼處を發足、はる／＼是まで參りて候とて、昨夜更ふけて吾假屋に到着まし／＼、今日こそは是非々々御目通願はしけれとの儀、如何取はからひ申すべきやと、一々言上に及びければ餘の人ならぬ文覺上人、ゑにしいとも／＼淺からぬ御坊たとへ狩倉のなかばなりとも、何かそれ苦しかるべき、殊に懇願の儀とあれば何にやありけん心もとなし、いそぎ／＼見ゆべしと、御仰承たま

はりて義時は御前をまかで、此由落なく傳へければ、たへて久しき對面に上人は墨染の衣のひだと共に威儀を正して御前に出で、一應の辭誼わづかに濟むや、小松中將が忘片身六代君が命御助けありて吾弟子にたまわれかしと宣へり。

武運圓滿一のかくる處もなく身に備はれる我賴朝にむかつては、誰とてか世に一人刄をむけ刄鋒をかへすもの、あるべき、されども我一朝にして彼帝鄕に遊ばん日は、起つて鼎の輕重を訪はんもの又なきとしも限るべからず、と、遠く子々孫々の世までも荒増たまふ、御心づかひの極みはやがて猜疑とてひたすらに人を疑かふの念となりて、御中當さに日月の如くなるべき豫州をはじめ御同胞をさへも失なひたまふまでの御事なるを、いかで此言葉には驚ろきたまはざりけん、上人の懇願としいへば定めて堂塔の建立か、さては寺領の寄附なんど、こそ思ひたりしに、思ひきや怨敵の餘類殊にそが嫡流たる六代が助命の願、誠や迅雷急雨耳を蔽ふの隙なきまでに思し召し、上人の面を見詰たまひしがや、暫くは何の詞さへなくてありしを、漸くにしてたとへ御坊が詞なりとも、さることはゆめ／＼叶ふべきにあらず、と言捨て、つとたち上り、御足音もいとあらゝかに、別の御間に入りたまひぬ。

烈火の炎々たる、水を以てこを壓へなんとすればいよいよ其勢を增し、洪水の滔々たる堤をついて防がんとすればます／＼其力を極めて來る、人の忌む處强ひてそをなさしめんとすれば激して更に是に服せず、さればこそ上人もそを强ひなんは惡かるべしと其儘にして御前をさがり一度は其が宿とせる義時が假屋にありて更に又義時をはじめ、千葉三浦和田なんどの面々をかたらひて、そが次の又次の日には一同上人に從がひて御前に候し、ひたすらに六代君が助命あらんことをこそ懇願せり、懇願の詞やうやく終るや、源二位は聲

や丶荒く、源家再興の事については非常なる情と助とを蒙むれる上人の願ひ、たとひ何事にても吾身一代の内は必ず叶へ候はんと、日頃我と吾心に誓ひける事にしあれば、何事にてもあれ是までは無下に退ぞけまいらせたる事あるなし、されどこたびの一事ばかりはいかに〳〵宣まふとも決して〳〵叶ふべからず、見られよ御坊過ぎし平治の其むかし、江州鏡の驛路において、我虜の身となりし時、流石平家一門の統領なりけり、淨海入道こそは後の禍わひを遠く察し、疾く〳〵彼の小冠者をなきものにせよといひしこそ是二葉の中にかり取る手だて、それに何ぞや池の禪尼女々しくも余が面影のなき右馬允に似たりとて、强いて〳〵これを强ひ果は泣てまで入道にせまつて余が縷の如き命をたすけ、蛭が小島へ流せしことこそ、此上なくも策の誤まれるものなるを、知つていはざるか將またこれを知らざりしか、一門のうち誰一人此事を以て入道を諫むるもの丶なかりしは是千歳の恨なり、果せるかな虎の子は放たれし野において生長なし牙を鳴らし尾を振ひ日ならずして放てし人をたほし盡せり、若彼時にして我を助け置ざりければ、平家は今に至るまで赤旗の色褪ることなく、いよ丶榮へてあるべきものを、事の茲に出ざりしこそかへす〳〵もうらみなれ、されば池の禪尼が區々たる宋襄婦人の仁こそは、一門の仇となり終れり、今の時は猶これ平治の昔の如く、平家沒落の有様は當年の源氏が様にもよく似たり、此時に於てそが嫡流の一子六代が命を助くるは、たとへば我を助けたることの如く、後には源氏の仇となるべし、されば上人のかくも余に六代を助けよと强ひたまふは、宛然に池の禪尼の入道にせまりしが如く、面々一同にうち揃ふて詞を添ふることこそは、やがて禪尼を慫慂なせし彌平兵衛宗清が心にかはらず、源氏が家を行末にたほしなんずる心なるや、余もし情にもろくして六代を

助けんといへばそを遮ざり、諫むべき身のとも〳〵にこれを助けよといふはそも〳〵何の心ぞや、御坊とても亦家を興すべき相ありと見て余を助けたまひし如く、雄々敷も振ひたちて、源氏を倒すべき程の力あるべしと見たまふがまに〳〵、六代をかくもかばひたまふにや、返答の言葉こそきかまほしけれ、と事の當然に一同は何といふべき詞もなし、源二位なほも詞をつぎ、よも答ふべき言葉とてはあらざるべし、かりにも物の理を解し得る程のものにして、是ほどの事誰か知らであるべきぞや、知つて是を余に強ふるか、これ此上もなき不忠なり、もしこを知らでありしなば是此上もなき不明なり、人の臣となつて不忠不明のともがらはいづれもともに死に當ると古人は書いて殘したり、都において北條遠州上人に誓ひし事をかたく守り、今に六代をなきものにせであるや必せり、一日を宥うせば必ずや百日の悔あり、あらためてそを催促の使、義時汝に命ずべし、急ぎ〳〵都にのぼり直ちに六代が首斬りて下り、余が實檢にそなふべしと、遠州への傳達もし少しにても怠るあれば其罪重くしてまぬかるべからず、と一々の仰承はるものから義時はいまだ立ちもあがらず、更に他をいはんとするをいはせたまはず、さては汝義時め、父程にてはあらざりけり、など余が詞を輕しむるや、全く以て其儀にあらず、其儀ならずば疾く〳〵起て、君命を帶ては家門に入らずしてゆくといふにあらざるかや、いざとく〳〵といらだちたまふ、文覺上人むつくと席をたち上り、此御使相州殿に仰あるまでも更になし、われこそ自から馳せ下りいかにも六代が首斬來りて實檢に供へまいらすべし、大聖不動明王も照覽あれ毛頭相違あらざるべし、さるにても其むかし福原囚の御所に於て、陰密々の院宣を承はり、或時は山に寐ね又野邊に伏し、きびしき平家の目を忍び、樣々と艱難辛苦の其後に蛭が小島の配所に於

て、是を渡せし其時には何と仰のありしぞや、必ず忘たまはざるべし、されどかくまでも不信の武將に信を以て攻まるも用なし、唯々六代の首きりきたりて實檢に供したる後はわれも亦干死してその首と共に野に捨らるべし、されば日頃奉行せる一切の功德は殘らずこれを惡魔大王にまいらせ、そが力によりて行末々まで鎌倉山に祟をなすべし、されば候これまでなりと、世に恐ろしき



詞をのこし罷りいでんとせる此時早く、此度の事について一言申あげたきとありて、後ればせに參上せり、吾君にも暫く御用捨、御坊にもまづ〳〵靜まりたまはれよと、聲ほがらかに高く呼はり、悠々として入來りしは是誰ぞや、きらと並べる星月夜鎌倉山に其人ありと、名聲今の世にたかく、兒童走卒までも知らざるものなき、當代の賢者、畠山次郎重忠なり、源二位をはじめ並居る一同はいづれも眼を重忠が一身に注ぎいかなることをいふにやと、いと靜やかに靜まれる中に、重忠は騷ぐ色なく其座につき、さて何よりも感じ入りて候は、吾君の御意に候と、聞きたまふ源二位は知らず識らず膝おし進め、重忠何とまうすぞといとゑましげに問ひたまふ、さん候平家の嫡流小松中將が忘れ片身六代君が命こそいかにしても助くべきにあらずとの仰こそ、まことや斧を用ふるの悔なかるべき御はからひ、重忠誠に恐入感心仕て候、流石は余が股肱と賴む汝重忠よくも〳〵いふたりけり、汝等なみいる一同も心をさだめてよくきゝ置け、千羊の皮は一狐の腋にしかずといふこと今こそ思ひ當りたり、鎌倉中の諸士にまさる實に一人の重忠なり、天幸にしてかゝる賢明の臣を與へたまひし事を謝す、過分なる吾君の御詞身にあまりいとも勿躰なくこそ候へ、然るに重忠こそ御前に於て申あげたき一事あり、そは又重忠命請の助言ならずや、決して〳〵、一は以て吾君の御聞に達し一は以て上人はじめ一同の面々へ御話し申たきいはゞ巷談童謠の類にて候、されば耳に逆ふてふ諫言にても更になく、源氏を倒す所存かと君の御叱かふむりたる命請の助言にても候はず、事ながく吾君はじめいづれも方いざ御聞下さるべしと諄々として說來る一塲の諷諫よく賴朝が心を和らげ上人の望かなふやはたいなや、諸子次號のいづるをまて。

稚兒櫻

（西京 矢部山人）

春がすみ
都の空に立ちしより
御苑の松の木の間には
見渡す限り花の雲
まだうら若き佐保姫が
柳櫻をこき交せて
織り出す春のあや錦
かざるに惜や浮世には」
春の春なる御所の春
花の花なる櫻花
七重八重咲く九重の
花こそ春の魂なれや
花は言はねど芝生には
自然からなす小逕あり
浮かれ勝ちなる都人
けがすな花の下蔭を」
近衛の庭の糸櫻
昔を今に繰り返す
車返しの八重櫻
色香めでたき其中に
一もとゆかし稚兒櫻
七重八重には咲かねども
一重に匂ふ袖かろく
春風に舞ふ姿こそ
一しほ春の眺めなれ」
されど二とせこのかたは
夜半降る雨や花嵐

防ぎし松の枯れしより
靜心なき稚兒櫻
降る春雨に惱まされ
袂に餘る露の玉
包みかねてぞ見えにける
末たのもしき稚木の
又こん春は如何ならん
心元なき花の上」
あはれやさしき稚兒櫻
我が古庭に移さんと
思ふ心はなけれども
移ろひ易き世の人に
如何で折らせん一枝だに
いざや八重がき立て籠めて
浮世の風を防がなむ
いざや八重雲引き遮れ
浮世の人を隔てなむ
あはれ命の盡くる迄
花の姿の散る迄は
千代も八千代も萬世も」

談叢

歷史に名高き百姓娘の生立

楓葉

水車を動かす水流の源は寂寞の地より來ると云ふ諺

は、げにも名言なるかな。

昔は佛蘭西領今は日耳曼の支配なるローレンヌ州に、ドムレミーてふ小村あり。後は木立茂りし丘、昔は[illegible]青き牧場はるかに相連り、いとも靜けき小村なり。[illegible]民昔より農を業とし、春の朝に牛羊を牧ひ、秋の夕に穀を刈りて、世は移り時は變れど、此村のみは昔ながらの有樣なり。此村の上手に一軒の寺ありて、寺のほとりに一軒の古家立てり。此あたりを過ぐる者は、必ず足を枉げて此古家を訪ふ。

今は五百年餘の昔となりぬ、西洋の暦にて千四百十二年の正月六日と云ふ夜に、此家に娘生れけり。家は先づ村中屈指の分限百姓にて、八町あまりの畑牧場山林をもち、一年千圓餘の收入あり。父は村の役をも務め、巡禮などは必ず此家に立寄りて施を受けぬ。母も此あたりには珍らしき開けたる人にて、曾て羅馬にも行きしことありき。夫婦、子三人、女二人、七人の家内蔓

[illegible]傳をなし、[illegible]族一同畑へ出で[illegible]き、或は馬に乘りて川に飲ひ、また順番に當れば村の牛羊を共同牧場に驅りぬ。夕陽傾きて黃昏の煙おもむろに村を[illegible]なたの道に牛羊の鈴の音チャラ／＼と[illegible]を渡りて歸り、一家打集ひて火を起し食[illegible]しき晩餐の卓に向ふ。

此乙女は信心深き子なりき。日曜の寺參りは元[illegible]

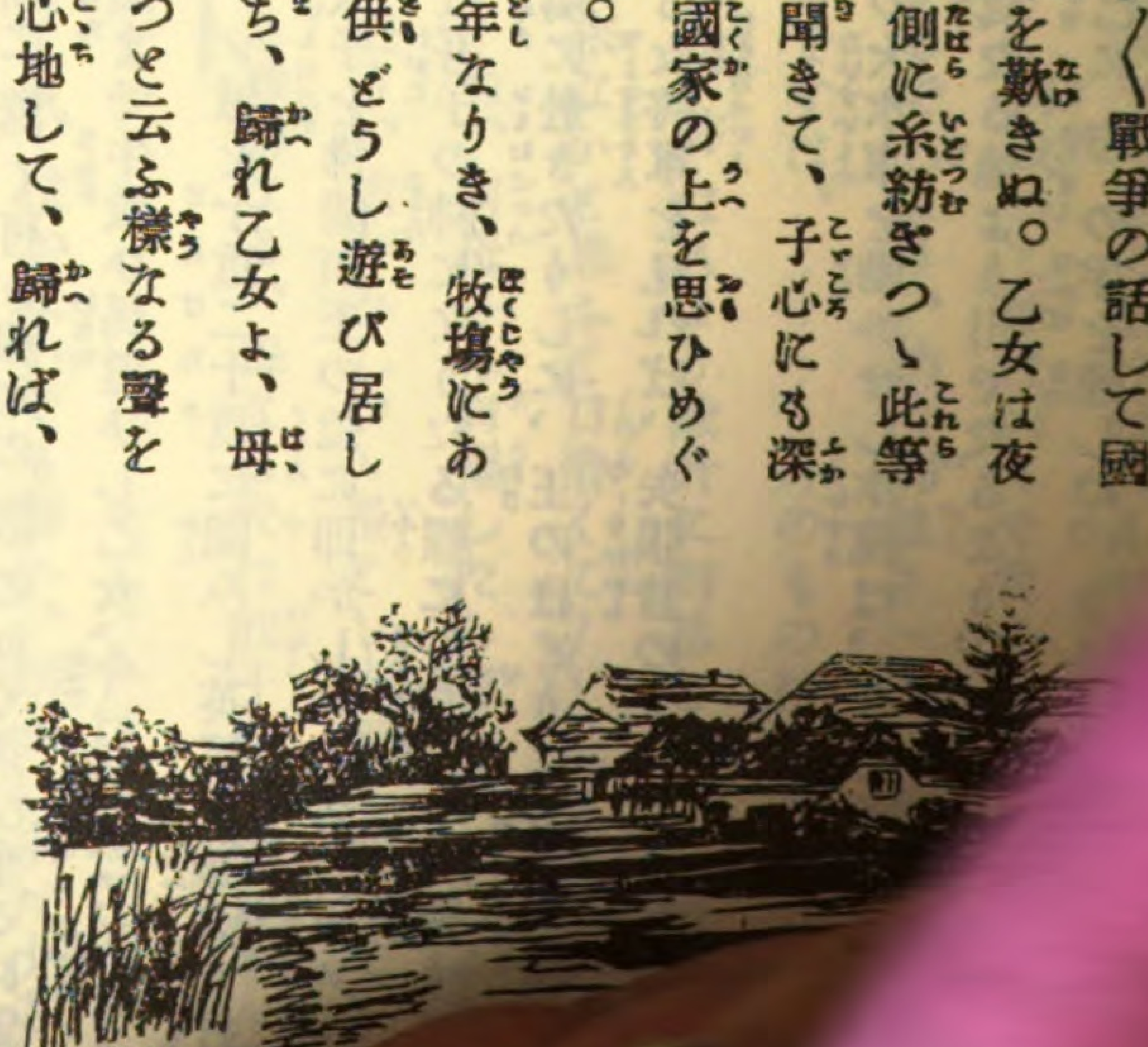


自然からなす小逕あり
浮かれ勝ちなる都人
けがすな花の下蔭を」

なく、近所近在の祝ひにしば〳〵詣で、祝祭りの日は手織の水色木綿の着物を着て近所の子供と遊びありき、身體甚だ健康にて病氣と云ふ事を知らず。其人と爲りやさしく人好きのする質にして、美しき心は顔に溢れぬ。

ドムレミーの村は佛蘭西王の大忠臣なりけるが、村より半里ばかり離れし某の村は之に反して常にドムレミー村人の爲めに王の敵と指さゝれぬ。此時は英國よりしば〳〵襲ひ入りて合戰絶間なき程の事とて、此村に立寄る旅人は諸方より軍さの話を齎し來り、競爭の心次第に小供の間にも燃へ起りて、此村と彼村との間にしば〳〵小供軍あり。彼乙女も女にこそあれ、元氣は男にも讓るまじければ、兄弟諸共軍に加はりて勝負を爭ふこと常なりける。

程なく眞の戰爭は此村にまで襲ひ到り、乙女の一家は故郷を去て亂の定まる迄ニウシヤタウと云ふ所に逃れぬ。我國危しとの歎は、如[...]りけむ。冬の夜々村の老人[...]れる榾火を圍みて佛蘭西の危[...]やしば〳〵戰爭の話して國の行末を歎きぬ。乙女は夜夜母の側に糸紡ぎつゝ此等の話を聞きて、子心にも深く〳〵國家の上を思ひめぐらしぬ。



十三の年なりき、牧場にありて子供どうし遊び居しに、忽ち、歸れ乙女よ、母汝を待つと云ふ樣なる聲を聞きし心地して、歸れば、母は呼びし覺もなく要もなしと云ふに、また牧場へと行かむとするに、忽ち透りたる光れる霧の如きもの

は、げにも名言なるかな。
昔は佛蘭西領今は日耳曼の支配なるローレンヌ州に、ドムレミーてふ小村あり。後は木立茂りし丘、前は草青き牧場はるかに相連り、いとも靜けき小村なり。村民昔より農を業とし、春の朝に牛羊を牧ひ、秋の夕に穀を刈りて、世は移り時は變れど、此村のみは昔ながらの有樣なり。此村の上手に一軒の寺ありて、寺のほとりに一軒の古家立てり。此あたりを過ぐる者は、必ず足を枉げて此古家を訪ふ。
今は五百年餘の昔となりぬ、西洋の暦にて千四百十二年の正月六日と云ふ夜に、此家に娘生れけり。家は先づ村中屈指の分限百姓にて、八町あまりの畑牧場山林をもち、一年千圓餘の收入あり。父は村の役をも務め、巡禮などは必ず此家に立寄りて施を受けぬ。母も此あたりには珍らしき開けたる人にて、曾て羅馬にも行きしことありき。夫婦、子三人、女二人、七人の家内蔓蘿生へ茂りし小家に住みて、月日穩やかに親は老け子は生ひ立ちける。
偖此家に生れし女は、兩親兄弟に愛せられ、村人に愛でられ、朝は鳥と共に起き出で兄弟と火をたきつけ、素足に草踏み分けて小川に水を汲み、朝飯の仕度の手傳をなし、晝間は家族一同畑へ出で、働き、或は馬に乘りて川に飲ひ、また順番に當れば村の牛羊を共同牧場に驅りぬ。

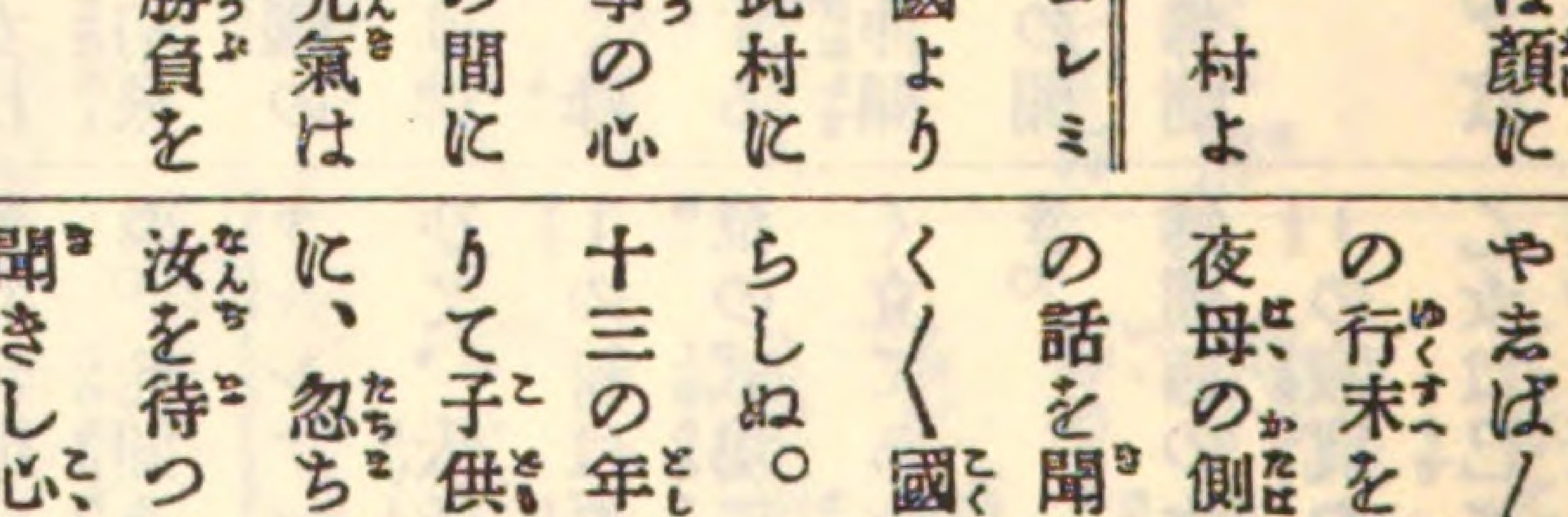


夕陽傾きて黄昏の煙おもむろに村を籠むれば、川のあなたの道に牛羊の鈴の音チャラ〳〵響きて、乙女は川を渡りて歸り、一家打集ひて火を起し食事を整へて樂しき晩餐の卓に向ふ。
此乙女は信心深き子なりき。日曜の寺參りは云ふ迄も

なく、近所近在の社寺にしば〱詣で、祝祭りの日は手織の水色木綿の着物を着て近所の子供と遊びありき、身躰甚だ健康にて病氣と云ふ事を知らず。其人と爲りやさしく人好きのする質にして、美しき心は顏に溢れぬ。

ドムレミーの村は佛蘭西王の大忠臣なりけるが、村より半里ばかり離れし某の村は之に反して常にドムレミー村人の爲めに王の敵と指さゝれぬ。此時は英國よりしば〱襲ひ入りて合戰絶間なき程の事とて、此村に立寄る旅人は諸方より軍さの話を齎し來り、競爭の心次第に小供の間にも燃へ起りて、此村と彼村との間にしば〱小供軍あり。彼乙女も女にこそあれ、元氣は男にも譲るまじければ、兄弟諸共軍に加はりて勝負を爭ふこと常なりける。

程なく眞の戰爭は此村にまで襲ひ到り、乙女の一家は故郷を去て亂の定まる迄ニウシヤタウと云ふ所に逃れぬ。我國危しとの感は、如何に深く此乙女の心に滲たりけむ。冬の夜々村の老人は集り來りて、ブチ〱燃れる榾火を圍みて佛蘭西の危き話をなし、巡禮や村人やしば〱戰爭の話して國の行末を歎きぬ。乙女は夜夜母の側に糸紡ぎつゝ此等の話を聞きて、子心にも深く〱國家の上を思ひめぐらしぬ。



十三の年なりき、牧場にありて子供どうし遊び居しに、忽ち、歸れ乙女よ、母汝を待つと云ふ樣なる聲を聞きし心地して、歸れば、母は呼びし覺もなく要もなしと云ふに、また牧場へと行かむとするに、忽ち透りたる光れる霧の如きもの

眼前にあらはれ、霧の中より聲ありて云ふ、汝は此村に朽つる者ならず、汝こそ國の難を濟ひ、太子を位につけ、民を安んじ、敵を退く可き者なれ、と。乙女は呆れ果て、立ちぬ。此より晝となく夜となく斯の幻象は來り、五年が間乙女は惑ひに惑ひたりしが、英國の軍連勝してナルレアン城を圍みゐはや此城落ちなば佛蘭西の國潰れむと云ふ時となりて、幻象は雨の如く降り來り、乙女は仕事も手につかず、睡ることも食することも得せず、積る思は口に溢れて乙女は道に遊仲間に逢ひて「友よ、クロイゼーとヴァウクールールの間に一人の少女起らん、此少女は一年が間に太子を佛蘭西王の位につけ奉る可し」と云ふに到りぬ。

村人は乙女狂しぬと笑ひ、父は怒りて分別をかへずば川に沈む可きぞと責め、母は泣きて乙女を長く膝下に引つけ置かむともがきぬ。然れど幻象は日々に來りて乙女を促し、乙女は終に村を出で、未だ曾て見もせず知りもせぬ世の中に打て出でぬ。

涙と笑と恐を以て乙女を送りし靜かなる村は、是より暫しが間に驚く可き報知の霰の如く飛び來るに驚きぬ。此間まで牛牧ひ馬追ひし乙女、今は鎧披て刄とり、オルレアン城を十重二十重に圍みし英軍を難なく打拂ひて、太子を佛蘭西王の位に即かしめける。ドムレミーの村は吾子の神になりたる樣に打喜びて、舉りて即位の式場に赴きたりしに、王のほとりに近く天使の如く立てる女將軍を見れば、矢張昔のやさしき乙女なりき。

佛蘭西の大水車を動かせし水流は、まことにドムレミーの寂寞たる地より出でたるなり。

乙女は已に志の半を遂しぬ。されど英國の軍は終に乙女を捕へて之を焚き殺しぬ。彼女の香しき骨は火中の灰となれり。然れど彼女が生れ育ちし家は、五百年を經て今日に殘り、永く人をして限りなき懷古の感を

起さしむ。此家もまた朽つるの時あらむ。然れど此家より出でゝ佛蘭西を救ひし百姓娘ジャンヌ、ダアクの名は何時かは朽つ可き。

可愛らしき小犬

或日のことなりし、白と呼ぶ可愛らしき小犬、そが慈母の許に來り、優しき後足を屈め、其の可愛らしき口を慈母の顔に向けて、

「阿母さん、あのね坊は御主人が大好ですよ、御主人が坊を可愛がッてねへ、毎日の樣に坊が好な物を下さるの、其れだから坊は御主人が一番難有い好ひ人だと思ふは……何うぞ、ね、阿母さん早く御主人の御役に立つて、此の御恩返をしたいと思ふの…………ね、阿母さん、何うしたら出來ましよう、坊は馬の樣に車を輓いたり荷を脊負つたりすることは出來ないし、牝牛の樣に乳を搾つたり、家禽の樣に卵を産むだり、又た猫の樣に鼠を捕つたりすることは出來ないし、カナリヤの樣に音樂で御主人を御慰め申すには、ワンワンの濁聲では出來ないが、せめて豚にでも似て居れば死んでも善いのよ阿母さん……何故つて豚は死んで自分の肉を御主人の食に献するでしよう、坊は御恩さへ返せりやア死んでも善のですは、……外のものは夫々御用をして居るに坊許は人より餘計に御恩を蒙つて居ながら何も出來ないと思ふと口惜くて／＼泣き度くなるは……ね、阿母さん何樣したら善いのでしよう。

と言ひ終り、齒がみしつゝ最とゞ悲氣に俯向たるぞあはれにも殊勝なる、母なる犬は我子の愁歎をきゝ之を慰めて

「よし／＼、泣かないでも善い、坊やは未だ小さいから何も出來ないのだよ、斑ちやんの樣に大きくなると門番でも何でも出來るから……善いかい、よ

く御主人の命令を聞いて大切にしなければいけません、其柄坊やが出來る事は骨を折つておしなさい、左様すれば一層坊やを可愛がつて下さるよ。

母の此のうけあひに喜んで小犬は主人の居所に走り至れり、彼は何時も主人を見ると小さき尾を振り嬉しげに驅け廻り、はては立止りて尊敬と親愛の目を以て彼の主人を見つむる様は無邪氣にて愛らし、主人は小犬の頭を幾度か撫で

「オー白よ、白は正直で可愛い奴だ、私を見ると此の通り喜ぶんだもの、よし／＼何んぞ買て遣らうの、うれしいか其様なに」

と言ふを聞くときは小犬は喜んで何處にか遊戯に行くなり、かく小犬は主人を見舞ふことを毎日の日課として樂しみき、若し彼の主人が近郊に逍遙するとき彼は必ず供附して、道々種々の珍らしき物に慰まれ喜ばしげに主人の足下を廻り又は跨を潜るなぞ、主人にも之れを知らしめんとするもの丶如し、而して主人の歩行を先きになり後になりして護衛する如き擧動は犬も畜生なるかと疑はしむるに至る、然れども主人は小犬が汚れたる足にて彼れが身躰に觸れ又亂りに彼れが室内に入るを嚴禁したりしなり。

其後主人は小犬に要務を命じ、其の力を試驗したりしに小犬は優等の成功を以て及第し主人の前に、よき復命を持ち來りけり、遂に小犬は重き業務を擔任して主人を輔けんと企てり。

即ち

雞のために其の食物を掠奪する雀を追拂ふ事、怪しき動物の牧塲に入るを防ぎ又た家畜の逃亡を番する事

斑犬の吠ゆる聲を聞く時は直ちに守鬪の準備をなす事

等は程なく熟したる勤勞なりき。

主人の田野に耕作して、上着を路傍に脱ぎ置く事あれば、小犬は其側に嚴しく構へて、獸類は勿論人足の塵芥だに主人の上着の上には置かせじとする樣可笑しくも忠實の情感するに餘あり、されば主人には益す寵用されて數多の勤勞に從ひ、今は全く小主君の近衛兵となれり。

程なく主人が恐ろしき病魔に犯され、危篤の狀をあらはし、青褪めたる顏色を以て寢床に横たはるや、小犬は病室の入口に直立し、晝夜寢食を顧みず、病室を離れずかなしげに吠ゆる樣實にあはれなりき、幸ひに主人の病氣は數日にして癒え、苦しみたる顏の今は温顏を以て迎へらるゝに至れりければ、喜んで跳び入り其の健康を祝しけり、されば主人は此の忠實なる種々の擧動を愛し、益々大事を委任するに至れり。

炎熱燒くが如き夏の午後、主人清涼なる避暑の小亭に至り、此の愛犬を傍に置きて一睡を催しけるに、此亭古きものにて旣に朽廢したりしか或は地震にてもありしか、主人の高き鼾と共に忽然四方の壁及建物は恐ろしき音を以て震動を起し、續いで天井よりシックヒの碎片紛々として墮落する非常なる有樣に近衛兵の小犬は愕き惑ひ、尊き主人の生命が此の一分間に迫れるを見、彼は聲高く叫び出しが、高鼾の倘止まらざるにいらだち餘儀なく主人に飛付き、輕く驚醒よと主人の指に嚙付きたり。

主人がこれにて睡眠を覺まして驚きあわて家外に逃げ出でたる時は家屋は全く崩壞たり、其の間實に一毛を挾まざる危急の場合なりしなり、主人は幸ひ無事なりし、されど小犬はこれにより一歩後れたるため不幸にも家屋の碎片に打たれ、重き負傷を受け苦痛激しかりしといへども尙ほ忠實にも主人の後を殿しつゝ家に歸れりとぞ。

* * * *

此の話により主人は生命の親として小犬に感謝の心を注ぎ、益々其の忠實を愛し、小犬は主人の手厚き療治に負傷の癒えたるを喜び、尊き主人として、益其恩惠に親しみけりとなん。

家政

レモン

レモンは誠にいろ／＼の効能ある果實にて、顏に小さなつぶ／＼のできる人は、一週に三度づゝもレモンの汁をぬれば奇麗になをるのみならず、色を白く滑かにし艶を生ず。餘り外出せざる婦人などは額鼻唇等血液の循環わろく垢しみ易きものなるが、これは石鹸などにてはなか／＼落ちず、されど此汁にて洗へば直ちに奇麗となるものなり。西印度あたりにてはレモン湯ありて、身躰を清淨にし强壯劑として最も効ありといふ。沐浴に用ふるには先づ五六個のレモンを各二ッに切りて水の中に入れ置き、入浴三十分前に取出すべし。又食後コップ一杯に一匕のレモンを入れて口中をそゝげば、葱煙草等の臭氣をさり、清涼防腐の効あり。又髪を洗ふに用ひて最ともよし。先づ髪を微温湯に浸してレモンにて擦り、のち又微温湯にそゝげば毛髪の艶を出し、よくふけ、あぶらを去る事石鹸などの及ぶ處にあらず。

ねぎ

昔より行者蒜といひて、葱蒜類は氣根の効あるものとして皆人のよく知るところなるが。此頃醫學博士シユーツフ氏の説にも、葱は神經の强壯劑となるのみならず、血液の循環をよくし、血色を美にし、豫防劑となる等効能著しと云ふ。尤も葱を食すれば呼吸口中等臭氣甚だしきものなれども、洋芹一芽を酢につけて

食すれば、立處に去るものなり。

紙枕

此頃米國に流行するものにて、夏日の用には鳥の羽毛などの枕に比してすゞしく養生にも最ともよろしといふ。紙は新聞紙などは臭ひあれば、狀袋（西洋にて用ゐる。）其他臭ひなき紙を切り、豫め縫ひたる切に入れて用ふ。紙は細く切る程工合よし。

たべ物の置所

此頃は土用に入りて却て雨天多く、いろ〳〵の病氣生じ、壯健なるものも何となく心地爽快ならざることゝて、主婦たるものはさま〴〵の注意を要することとなるが、さらぬだに腐敗し易き食物に就ては別して心を用ゐざるべからず。殊に追々流行病も起る事とて夢々疎に思ふべからず。食物につきて尤も困難なるは入場所にして、臺所用戸棚の多くは竈の近くにあるは誠に便利なれども危險なり、容易に腐敗せざるものにても幾倍腐敗を速むるやも知れず。されば可成風通よく清涼なる場所へ入れ置くやうにすべし。

栓ぬき

香水藥壜等の硝子栓抜けずして大に困ることあり。其時に壜全躰湯の中にしばらく入れ置くか、口と栓の間に羽にて油をさし、火の傍らにしばらく置きて後フランチルか羅紗の如き毛織物のきれを手にあて抜くときは容易にぬくを得べし。

目下の總菜

◉茄子の料理　唐煮といふは中通りの茄子を皮のまゝ頭より庖丁目をタテに細に入れ、酒にて一旦煮こぼし、味淋と醬油にて旨煮をすることなり。甘煮とは鹽

押の茄子を能く鹽を煮出し、砂糖ばかりにて煮るべし。小茄子の丸煮は小さき茄子のへたを去り、丸のまゝ茹でゝ、惡汁を拔き、味淋と醬油にてからい加減とし、鰹ぶしを入れ、汁なきやうに煮あげるなり。油いためは鍋に胡麻油をひき、小茄子を丸のまゝいため、而して後、味淋、醬油にて煮る。胡麻よごしは茄子の皮をむき湯にゆでゝ惡汁を去り、タテに四片五片に引き裂き、擂鉢の中に調製し置きたるより胡麻と煮汁の中に浸して食するなり。茄子のいりだしは茄子を切るか、又は小茄子なれば全躰のまゝ胡麻油にて素揚を爲し、大根擦を添え生醬油をかけて食す、隨分面白し。

◉鰌と鰻　東都の俗、土用中(殊に丑の日)鰌と鰻を食するを習とす、盖し土用中に右の川魚を食し置く時は、諸病の難を免るゝと言ひ傳ふ、それは兎も角鰌などは夏期に多きものゆゑ、能く此頃の總菜となる、普通は鰌鍋(土製の二重鍋)とて薄へぎ牛蒡と玉子とにて蒸煮にすれども、丸のまゝにて味噌汁にせば、鰌の腹中の玉子をも共に食し味一段美なり、それは鰌に能く水中にて泥をはかせ、酒にて殺すは、能く人の知る所なれど、鰌を桶に入れて能く水を去り、玉子を打ち割りて入れ、此の玉子を飲ませて此魚をよわらせ、中味噌、煮汁にて濃く煮かへしたる汁にて煮るなり。鰻の蒲燒は素人の家にてはなか／＼面倒なるものなれば、略して記さず、八幡やきといふ方法は、此魚を常の如く割きて中ぼねを去り、牛蒡をよきほどに切りて鰻を卷きつけ、まきとめは牛蒡にはさみ、横より串をさしてつけ燒にするなり。而して鰻と鰌とは、夏向茶碗蒸の材料とするに適するものなれど、たま／＼泥臭き嫌あり、これを避けんには、茶碗に入るゝ前に葛粉をまみり底の方へ沈ませ置く時は、一種風味ある茶碗蒸が出來るなり。

◉鯨汁　鯨汁も此頃の食品なり、無論白肉の白味噌

汁なるが、薄く切りざつと茹でゝ糠湯にて能くさらして濃脂を去り、而して後、味噌汁に入るべし、さなき時は脂濃くして食するに堪えざることあり、一旦酒にてさつと煮、其酒を捨てゝ味噌汁とするもあり、孰れもつまはさゝがき牛蒡、大根等、吸口は焼唐からし、胡椒など面白し。

小學について

賤の舍

私の宅え折々話に來る隣家の細君昨夕も來られ四方山の話の末其細君の云ふやう

宅の長男を先達から漸々小學校の一年に入學させましたが何も出來ぬ〳〵と毎日先生に叱られると申宅え歸るといつも泣顔をして居ますが四月からのを今になり急に覺へやうとするのはま事に無理だと思ひますよ其も三月の試驗休が終るとすぐ連て行きましたら滿六歳で無くては小學校へ入れる事は出來ぬ七月生れならば其生れた日にならぬ内は幼稚園で無くては入れられぬと校長さんが仰るのです幼稚園などはと思ひましたが七月迄參りましたらお友達も出來ませうし少しは學校になれるだろうと思ひ幼稚園に入れて置きましたが丁度此九日が生れた日で御座いますから其翌日私が連てまゐり漸く一年にしてもらいました其級の先生はまだ若ひ婦人でしたが宅のは四月から其迄のを少しも存ませんのに手習や本が急に六ッか敷なりますから出來ぬのも無理は無いと思はれますが先生は何も出來ぬ〳〵とお叱りなさるから最早學校へ行かぬなどゝ申てあれ程好でした學校を嫌がりますので毎朝〳〵機嫌を取て出すのが一骨折りで困り切ります

と切にこぼし居られたり是等の苦情は折々聞く所なるが無理ならぬ事と思はる、あまり幼少の頃より學問さ

するは悪き事ゆゑ小學校へ入學の期を滿六歳以後と定められるは尤もの事ながら然ばとて四月以後にて滿六歳となる小兒乃ち五月なり六月なりにて滿六歳となる小兒もし入學する時は他の五月生の小兒と共に改めて一年を成すにあらずやはり四月より成立ちある一年生と共に敎を受くる事なる故一ヶ月なり二ヶ月なり自身の習はざりし事も一時に覺へねばならぬ道理故小兒の身に取りては二倍も三倍も骨の折れる事なるべし一二ヶ月位はまだしも大勢の中には十一月又は十二月生れの者もあるべし彼等は毎日の學科の上に八ヶ月も九ヶ月も前の事をも覺へざるべからず然れば初より居る者より學力の劣る事は已を得ざる事なるべし何によらず自身の出來る事を好み不得手の事を嫌ふは小兒の常なれば學校の事も出來ればよしもし出來ずして先生の小言のみ聞く時は自然と學校へ行くを嫌がるやうになるは必然の理なりかくては滿六歳を入學期とするも一利一害かと思はるれど毎月〱一年級を區別して敎へるわけにも行まじ其を滿六歳前に學問させず、一時に多く敎へず然ばとて年を損せぬやうに敎育する良き工夫は無きものにや。

流行の栞　　流行子

あづまがけ（手がら）

近來市中にて見受くる、夏向新流行の手柄はあづまがけと稱するものにして網代編にしたり、妙齢向に多く見受らるゝは、白に藤、又はひわ、又は肉色、又は藤紫、赤にて、年増向には白に淡柹、黒、銀鼠最も多し、價は十五六錢なるよし。

夏座蒲團

本年の第一等の流行は安價物にて檜皮製なり、價十枚一圓七十錢の處。

一閑張は相變らずの流行にて十枚一圓四五十錢の處。

革擬紙製は十枚一圓五六十錢なれど入望少し。

藺製の十枚三四圓の處は最も中等以上の嗜好に適す。

形は圓形なるよりも長方形なるかた流行す。

雑録

紀念郵便切手

左に掲ぐるは故有栖川宮殿下及故北白川宮殿下の肖像を印したるものにして八月一日より使用する新郵便切手の標形



但し五錢二百萬葉、二錢五百萬葉を發行す

富士登山案内

夫の富士山越年を企てたる野中至氏より寄せたる富士登山案内朝日新聞に掲載あり簡にして要を得たるものなれば玆に採錄す

山頂に至るの道四條あり其里程は登山者所在地に依り何れを近しとも定め難けれども山路の平易なる點に於ては最近の開設に係るものにして東表口と稱し（又中畑口と稱す）御殿場停車場より中畑口村を經て山頂に通ずるを以て最とす此道たる殆んど一直線にして騎して二合五勺に到るべく又駕籠に乘て頂上に到るを得べし實に本山第一の便道にして運搬等の上に殆んど困難を感ずると比較的に少なし且つ東京に便宜なるを以て余（野中氏）の如きは特に此道を擇で上下運搬をなしたり御殿場停車場前に富士屋松屋大黒屋等あり何も評判宜し宿料は凡二十五錢强力を伴はんとする人は宿屋

より周旋す賃金は荷物の多少により一定せざるも大抵五十錢以上一圓の間通常七十五錢位なり此地に剛力組合なる者ありて宿屋より雇ふ時は順番を以て其需に應ず夏季中は登山者絕ゆることなければ荷物少なき人は必ずしも剛力を携へざるも可なり携帶品は辨當（剛力分は其客の負擔）草鞋一人に付五足（剛力の分も客の負擔する慣例なり是等は此地より携帶せざるも可なれども山に入ては運搬不便故室に賣捌くもの價高し）ドテラ（宿屋にて損料にて貸與す）金剛杖（一合前太郎坊にても賣捌く一本價五錢）是等は剛力脊負て道案內をなし若し手荷物少なく且つ御殿場下車の時日倘高ければ一里程先なる瀧河原に至り佐藤與平治方にても右の支度を爲す事を得彼の有名なる剛力鬼熊又鶴吉などは此地に住めり與平治宅は人烟の盡る所に在り此處より一大廣原を橫ぎりて木立に入る木立の盡る所即ち太郎坊なり是より上は絕て樹木あらず一合每に室あり何れも石窟なれば不潔譬へん方なし宿料廿五錢登るに從ひ其價高し是運搬に不便なればなり元來避難を目的に設けたる者なれば一度風雨に遇ふ時は金殿玉樓に勝るの心地す頂上に銀明水あり傍に官幣大社淺間神社あり（國幣中社なりしを今回官幣大社に列せらる）前に二三の室あり何も石窟なり社の後に一大舊噴火口あり深さ三百米突又西の方五町許りに劍峯觀測所あり之を富士の最高點とす好天氣の時四方の景色を縱にするの外富士自身は景勝を有する事なし然れども登山せし以上は外輪を巡り日の出を見ずして下る者は物足らぬ心地す噴口は社の許可を得て下男に案內せしむ其料十錢位下底に立て四方を仰げば壯觀比なし頂上を一周するに內輪廻りと外廻りとあり內輪廻は噴口の緣外輪廻りは八峯の頂を廻るを云ふ外輪は內輪廻の景を併せ見る事を得れば天氣の許す限りは可成外輪を廻るべし一時間にて澤山なり又日の出は至極奇にして麗なり成就岳の

頂より見るを第一とす之に間に合せんとせば前日より頂上に宿泊するが極上なれども八合目迄登り翌朝二時三時頃迄頂上に向ふも日の出の間に合ふべし社の東に比較的廣濶なる所あり賽河原と云ふ熱氣を存す湯を沸し雞卵を煮る事を得行く事少許にして淺間神社の末社あり傍に室十二三個あり宿泊する事を得るなり後の低所に金明水あり先づ頂上に着せば銀明水を飲み日の出を見社に參詣し室に入て甘酒を喫し（一杯二錢）噴口に入り然る後外輪を巡るべし賽河原の熱氣に遊ぶも一興なり（外輪を廻れば觀測所の前をも熱氣の前をも通過す）斯て下山に七合目より分析して寶永山の半腹（走りと稱す）を走り直ちに三合に至る甚愉快なり此間凡そ三十分間にて足る兎に角普通の人にて停車場より頂上まで十二時間下りは五時間にて充分なるべし弱き人は停車場より太郎坊まで馬を用ふべし賃金三十錢位又頂上まで籠を用ふることを得賃金十二三圓是れは先づ贅澤の登山なれど途中一合毎に小屋あるゆゑ屢々宿泊すれば老人婦女子と雖ども難事にあらず現に七十前後の老人の登るは數次見受る所なり又頂上に二三泊せんとする人は肉鑵二三と梅干を携ふべし滯在中暴風に遇ふも亦一興なり此山の上に登るに從ひ呼吸逼迫し又人に依りて激しき頭痛を感ずる者あれども五合邊にて下れば物忘れたる如く平癒す故に狼狽して見る所を見ずして下るは惜しき事なり暫く我慢すべし

奇特の少年

七月一日當地刊行の奥羽日々新聞中大海嘯彙報の項に左の一節あり寔に稀有の美談にして古しへの車胤か故事も想ひ合されて感慨の念に堪へず依て是を抜萃して貴社に投ず希くは都會の就學少年にして動もすれば奢恣安逸に流るゝ者の此記事を睹て自省の資ともなさば

一點の螢火も亦優に道を照して學びの意に限りなき光輝を放つべしとの微意に外ならず貴者足下餘白を割愛せば幸甚なり

（仙臺客寓に於て　石井槐雨記す）

●奇特の小兒　罹災者救護に就ては數多奇特者のある中に書くも嬉しき殊勝者は當市成出町半澤平助の借舍に住する何の某とて極めて貧しく僅かに竹皮草履などを造りて辛く其日を送る者なるが長男要助(十年)どいへるは南材木町小學校に通ひ日々勉强なし居たるが今度の變災に付ては各小學校とも夫々義捐の擧あり同校にても一人五錢以上を醵出する事とし受持敎員より各生徒へ傳へしに要助太く感激し如何にかして十錢も義捐せばやと思へども家には一錢の餘裕なく去とて出金せざるも本意なしと夫より每夜螢狩に出掛け翌朝出校前に大町邊を賣り步行き遂に十錢を得たるを以て直ちに之を義捐したりと貪慾飽く事を知らざる守錢奴之を見て少しく省みる處あれ

一家の慈善心

恕哉

人世固より悲むべきと多しと雖も、恐らく不時の天災に遭遇して非命の最後を遂ぐるの悲慘なるに若くはなかるべし、今回の三縣下大海嘯の慘狀は、新聞紙其精細を報ずるに就きて、益々酸鼻に堪へざるものあり、人として誰れか一片同情の淚なからんや、人の心の異なるは其面の異なるが如しと雖も、誰れか亦た惻隱の情を起さゞる者あらん、其情は現はれて慈善演劇となり、慈善相撲となり、演說となり、講談となり、義捐金の募集となり、看病婦の派遣となる、舌あるものは爲めに述べ、文あるものは爲めに筆し、金あるものは

爲めに捐ち、力あるものは爲めに働き、上は賢き邊より、下は九尺二間の裏店住居の者に至るまで、苟くも人たるの心を有するものは、應分の力を澁いでこれが救濟に盡す所あらんとす、是れ誠に良し。

然れども爰に一の注意すべきことあり、總て慈善の事業なるものは、人の德性に訴ふべき精神的事業にして、形容的虛飾の動作にあらず、故に名譽を貪らんが爲めの事業にもあらざれば、私利を營まんが爲めの事業にもあらず、唯だ人の情として衷心默視する能はざる惻隱の念より、迸り出づる一片友愛の熱泉たらざるを得ず、惻隱の心は仁の端なりと言ひ、陰德は善の極なりと言ふ、それ然り而して今や蕩々たる世の中は、名譽を貪るの世となり、陰德は頹れて陽德盛に、やゝもすれば慈善の事業を利して聲譽を貪るの道具たらしめんとする者あり、「彼が十圓の義捐をせば我が地位と名望と是非の上より五十圓位は義捐せねば世間の體裁に關するなど、慈善心に訴ふると言はんよりは、寧ろ地位及び名譽の競爭と言はん方適當ならんか、嗚呼今の世、誰れか「レプタ」二ツを獻じて天の譽を受けんとする者ぞ、「是れッ計りの義捐は外聞が惡るい」と言ふ者あるに至る、吁世は段々に名譽の奴隷たらんとす。

慈善心に富む家主に義捐心の焔々たる者あるに際しては、主婦たるものは堅吝の情に驅られて僻眼を逞ふし、義捐金するの餘裕あらば衣服を新調するの得策なるを喋々し、兒童が學校より慈善的精神を吹き込れ、歸つて之れを兩親に相談すれば、一言の下に叱せらるゝが如きは、往々予が耳にする所なり、故に家主に慈善心の勃々たるに際しても、主婦たる者のために其情火を打ち消され、兒童に良心の發揮するあるに當りても、兩親たるもの之を馬耳東風に附するが如き、甲乙其心を異にし、丙丁其見を別にして、遂に一家の良心を埋沒し去るに至るものあり。

一家團欒の裡より、慈善事業の爲めに盡すの議を成立たせ、一人の異議者なく、不平者なくして、快く潔く之を決行するの美なかる可からず、歐米にて宣教師或は慈善家中には、一家の意向をまとめ、所謂一家の眞心を發揮して、或は匿名にして義捐金を爲すもあり、或は其兒の慈善心を養成せんが爲めに、其兒の名義を以て義捐するものあり、これ實に慈善の精神に叶へるものにして、今や我邦に行はるゝ形容的名譽的の擧動と其趣を異にす、兎に角一家には必ず家內全躰に貫通する公共的慈善心なかる可からず、而して其慈善心たるや、勉めて精神的たらしめざる可からず、換言せば同胞としての同情を以て、眞個友愛の熱情よりして、人間としての義務として、一家の慈善的精神を發揮せざるべからず。

上毛孤兒院の爲めに
世の慈善家に訴ふ

內山はな

凡そ世に憫れなる者の中にも孤兒ほどいふも憫れなるはあらじ彼等はその身を訓誡する嚴父を有せず又その身を撫育する慈母を有せず人類にいとも貴ふべき親子自然の愛情は彼等の身に存せざるなり且つや寒暑を凌がんに衣服なく饑渇を醫せんに飲食なく又その身を寄せんに住宅なし彼等は恰も水上の浮萍の如く洵に天下無告の民たるなり同胞兄弟姉妹が斯くの如き慘境に泣き叫ぶを看ては誰か一掬の涙をそゝがざる者ぞ

上毛孤兒院はこの無告の孤兒を救育するが爲めに群馬縣前橋市岩神村に設立せらる過ぐる日吾夫が同院を參觀して歸り話せるを聞き同情の感に堪へざるまゝ今少しくその狀況を語らんに目下同院に收養せらるゝは六

歳より十四歳までの男女兒すべて十四人その中十三人は小學校に通學し一人は按摩を習へり養育を主任せらるゝは金子倘雄氏並に同夫人周子の兩名にて金子氏は日々鋤鍬を把りて子女の食料を耕作し朝夜二回子女を膝下に集めて訓誡を與へ專らその監督を務められ同子は乳兒を抱きながら十四歳の女兒を相手に三度の食事から子女が身に纏ふ衣服も汚つかぬやう洗濯して着せ慈善家よりの寄附にかゝる古着等は洗張し綴りて仕立又女兒には餘暇に造花を敎へらる傳ひ聞く同子は海軍主計某氏とて日清戰爭に偉功を奏せられし方の令嬢とかや斯く貴女の身をもてこの辛酸を嘗めらるゝこと吾等たゞ慚愧の外なし他事は措き吾夫が同院に參りの時の摸樣を聞くにその日は日曜日にて子女悉く在院し院外に到るや遊戲を爲しつゝありし子女一同は遊戲を止めて敬禮を爲す鈴木氏の案內につれて六疊敷の一室に入るこれぞ從來十四人の子女が天地の住宅と賴む所なれ同夫人と一禮を了るとき鈴木氏は更に新築の一室に誘はる坐に着くや直ちに子女一同到りて輪坐し一々叮嚀に挨拶を述ぶ鈴木氏は吾夫が贈りし饅頭を與へられしに子女は各々禮を述べて受取り掌上に載せて手を膝の上に置けり暫くして吾夫の言に因り鈴木氏より「一同お饅頭を頂戴せられよ」との一語を發せらるゝや子女は更に禮語を述べてさも嬉しげに食し始めりその時の子女の喜色は今倘ほ目に在りと吾夫が歸りての咄なり

それより同院創立以來の經過につき種々の問題を爲し鈴木氏が語られし要領を摘めば同院は始め前橋市に名高き旅人宿住吉屋の隱居宮內文作及び故横地源七郎二氏の發企にかゝり基本金など少しもこれなく初の程は專ら氏等の持出しに依りて維持し爾來多少の寄附もあり又田畑を借受けて耕作を爲しそれより收穫せる資料にて支持しもて今日に至り別に家屋の建築費として貯

蓄しいかなる困難の際にも支出せざりしもの積りて今度の新築を爲すに至れりこれまでは病兒あるも室を別たしむる能はず喧噪せる狹室に他兒と起臥を共にせしめ氣の毒と思ひしこと幾度なりし幸に流行病に罹りし者なかりしも若しやその事もありたらんには如何にせんと憂ひしが今は恩愛深き慈善家の惠みに因りてこれ等の憂慮を除くを得たりされど每月豫約の寄附金は目下僅々三拾錢に滿たず他に貯蓄の金物もなければこの後の經過こそいとも憂ふるなれ何卒して子女を斷食せしむるに至らしめざるやう致したしと

嗚呼斷食の一語いかに聽者の皷膜を刺擊することよ吾等鈴木氏の談話を傳ひ聞くだに心慄ひ身戰けり現今我國に設立せらるゝ所の養育院若くは孤兒院にして終始十全に維持せられたるものはなしある時は粥をすゝりある時は食を斷ちし例尠からず上毛孤兒院は今まで斯くの如き慘境に陷りしことなく子女が一日學業を廢したることとなきは何等の幸ぞや特に同院の子女は行儀いと正しく學業の成蹟甚だ宜しく小學校より特別褒狀を授かりし者さへありと豈に喜ばしきことならずや

されど同院は未だ基本金とてこれあるにあらず豫約の寄附いと亦少しその維持將に困難に陷らんとするの狀あり吾等今に於て世の慈善家に訴ふる所あらんと欲す心ある人々よ孤兒の爲めに一掬の淚をそゝぎ給はずや

男やもめ

一葉庵主人

（上）

花がさく年增盛の獨居は。町内の狼連を騷がすめれど。何やらが湧くとて鼻ッつまみの扱うくる男やもめ。諺にいつはりは內職に細き煙。建具屋の長公とて仲間からも。笑はれ者の極上人。酒も呑まず煙草も吸はず。

これといふ道樂の無きかはりに。三尺の障子二尺五寸に。差曲尺の何處にか足らぬ所あればや。菓子折さては塵取位を關の山として。小暗き裏長屋に日永の鼻唄。夫れさい繰返へす一ッ文句。誰に習ひしか立聞きしか。柳〳〵での端唄をおろぬいて義太夫でゆく可笑しさ。何時も井端會議の好材料とはなりき。近所の亭主子供の世話よりも他人の世話を燒きたがる女房。「長さん大分お精が出るじやァないか。酒煙草はもとより道樂といふ道樂もせず。さう氣根に稼いだらお金のやりばにもお困りだらふ。夫はさうとお前も一人でかうして居るより。お細君をもらつたら第一煮焼の世話もぬけ。仕事にも張合がつき。隨つて世間躰もよいではないかとからかい半分釣つて見るに。長公ニヤ〳〵と笑つて。鉋の刄を前額の禿げたる頭にて二三返こすり。餘念なくサラリ〳〵と板を削るのみ。張合なければ終には朝夕の挨拶する人も無くなりぬ。

犢鼻褌の半風子。ひろふたる年の數も四十餘り。分別ざかりと世にはいふめれど。長公何の分別もつけず。煤けたる戸棚に二枚の布團。たゝんでからが價値の知れた破鍋に柄蓋。殘物は鼠の舌に洗はせて。荒るゝにまかすればや。勝手元といふらん。蜘蛛の子の張るスヰンギング。コット。蛞蝓の布設せしレール。ウェー。實に以てお話の外なれども。長公更らに意にする所なし。

或日の事長公得意先に出來上れる品々を屆けて。何時になき上機嫌の千鳥足。歩く樣にても醉たりとは見へける。此夜は珍らしく夜業もやすみて。近所へは明日田舍の去る方へ雇はれ行く由披露して。禮心にか蕎麥をくばり。翌朝近所の人の起出ざる内に。何處とはなく出立せる樣なりき。

（下）

其日の晝少し過ぐる頃。年頃五十餘りの職人風の男。三十三四と見へたる意氣づくりの年增を伴ひ。長公を尋ね來りて。彼の世話好なる女房に。見れば不在の樣子なれど。行先は御存じなきや。知り給はゝ敎へ給へといふ。ハテこれは御客にしても相應からぬ客。何に

かこれには仔細あるべしと。長公の田舎に雁はれたりとて。今朝未明に出立せる由を語れば。男も女も驚きたる樣子にて互に顏を見合せ居たりしが。殊に女は打萎れて吐息する眼に泪あり。何か御知己かと槍を入れ。天晴急所をと思ふに其甲斐なく。イヤ少し仔細ありて當人に是非あはねばならぬ者。……これは思はぬ失禮を致しましたとソコ〳〵に歸り行けり。彼の女房は鼠を逃したる男之介の躰……

二日程經て吾妻橋に女の投身ありといふ。彼の世話好なる女房は通りかゝりてフト其女を見るに。先の日長公を尋ねたる年增なり。翌日の新聞に女の素性を詳しく記せり。女の名はお艶とよびて京橋區に住みて建金と呼ばれたる。建具屋仲間には親分株なりし者の一人娘。親の目鑑を以つて業といひ心掛といひ。これならばと彼の長公を撰みて婿とせるも。夫婦中兎角面白からず。お艶は何時しか或純帳の。蝶十郎とかよべる役者と有金をつかみて遁亡せり。……

長公自ら養家を去つて。終に前日の腕前なかりし。……新聞にてさてはさうかと。近所の人の讀みたる後三四日を經て。長公歸り來れり。柳〳〵での鼻唄うたふに變なけれど。夫かと聞く耳にはさこそと憐れなりけり。

（完）

八月九日日蝕と宇内天文學者

皆日蝕は何時にても大に世の耳目を惹起するものなれば、天象中最も留意すべき異象と思惟せらるゝは左もあるべき事也。故ハインド氏は『如何なる記述も、其物凄き壯觀を會得せしむる能はず』と謂ひしも、皆日蝕に關する記述多きが故に、其有樣位を知らざる者はなかるべし、烏羽玉の黑白も辨へ難き月球、突如として太陽を蔽ふや、眞珠の如き明光、黑塊の月球を圍むの美景は、他に決して比類とてはあらざる也。

來る八月九日の日蝕皆既は、幸にして英國を距る遠からざる諸地にて目擊するを得べきが故に、英國多數の天文學者は、諸地に到りて觀測上の便宜を得べし、而して日蝕觀測者の目下の動靜は、頗る面白きものな

れば、左に其大勢を說かむ。
中央日蝕線は、諾威の北部ノヴァ、ゼムブラ（北氷洋中の二島）、西伯利亞、及日本を通貫すべし。即ち第一圖の如し、（該圖は、『不列顛國天文學會雜誌』記者の作れるものにして、該雜誌二百九十八頁挿入）、諾威にて最好の觀測地は、ヴァーレンゲル山頭のヴァヅーとす、數群の觀測者玆に集り、天幕を張り、一日千秋の思をなして、日蝕を俟てり、此處にては、皆蝕時限約百秒間にして、太陽を觀るの度は、地平線上十五度とす。」
日本は、天文學上最上の觀測所たりと雖も、海波千里の遠き、多數觀測者の渡航を得る能はざるべし、日本にては、時限二分三十秒以上に涉り、太陽を觀るの度、諾威よりも高かるべし。
皆蝕線に沿ふて、八個所の觀測地（第一圖參看）を設けあれば、何れも幾群の觀測隊是に集合すべし。
（一）ボヅゥ（Bodö）は、多くの觀測者を見るべきも、重大なる觀測をなすべき好位置に非ず。
（二）露國芬蘭のエノンテキス（Enontekis）は、露國天文學會實測者の撰定する處となれり、教授グラセナップ及びヴキヒコヴスキーも玆に來るべし。
（三）ヴァヅゥ附近（Vadsö）には、英國政府派出員一行玆に會すべし、博士コムモン、教授ロキヤー及び余等の一隊を始めとし、博士ドウ井ング及モオンダー氏の率ゆる英國天文學會の一隊、蘇哥蘭天文學官博士コープランドの一行及サー、ロバート、ボール、エヴァーセッド氏、ファラ マリオン山觀測所派遣員アントニアヅ氏等也。」



日蝕皆既線（八月九日）

(四)ノヴァ、ゼムブラ(Nora Jembla)には、露國科學校及カザン博物協會派出員を見るべし。

(五)オビ河口(Obi)にも、他の露國天文學會員派遣せらるべし。

(六)レナ河上のオレクミンスク(Olekminsk)には、露國天文學會員觀測主地となり、イルコツク氣象臺よりは、教授ヴオズチセンスキー派出せらるべし。

(七)黒龍江下流の一觀測所は、ブルコワ氣象臺派遣員來るべし。

(八)日本北海道(原文にはYezo Islandと記せり)に、派遣せらるべき英國政府觀測員の一行は、天文學宮教授ターナー及び海軍大佐ヒルズ氏等なり、佛國觀測者には、デスランドレス氏之が長となりし一行あり、リック觀象臺よりは、教授スシアペル之を率ひ、米國觀測者には、教授トッド氏の一行あり。

(以上本月十八日國民新聞參照)

上にも記す通り我北海道は日蝕の中心に當るものなれば最も望見に適せり、中央氣象臺の報する所により八月九日日蝕の時刻を記すれば

地名	經度	緯度	初虧 時刻	初虧 方向	食既 時刻	食既 方向	生光 時刻	生光 方向	復圓 時刻	復圓 方向
宗谷	一四一度五五分三	四五度三〇分五	一時二一分九	右	二時三二分五	左	二時三五分一	右偏下	三時四〇分二	左偏上
網走	一四四度一六分六	四四度一分二	一時二七分三	右	二時三七分四	左上之間	二時三九分六	右偏上	三時四四分〇	左偏上
釧路	一四四度二二分二	四二度五八分〇	一時二九分三	右	二時三九分四	左	二時四一分九	右偏下	三時四六分一	左偏上
根室	一四五度三五分〇	四三度二〇分〇	一時三〇分〇	右	二時四〇分二	上偏左	二時四一分三	右上之間	三時四五分八	左偏上

則ち日蝕起終と皆既望見時間は

地名	日食起終の時間	皆既食の時間
宗谷	二時一八分二	二分六
網走	二時一六分七	二分二
釧路	二時一六分七	二分五
根室	二時一五分八	一分一

諸地方よりも望見し得らる、えぶし硝子越に望まば、眼に障なかるべし。

●社告

歌苑次回課題　避暑。納涼。夕立。古寺。

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

廣告締切八月十日限り

八月十五日發兌



第三百〇九號

目次

時勢の觀察　内村鑑三

八章に分つ、公德と私德の分離、實益主義の國民、自贊的國民、國民の罪惡と其建築物、方針の定まらざる理由、東洋の青年國、俗史論、小なる日本、是れ實に世を救ふの文字、讀み來りて痛快極りなし。

死刑前の六時間　ユーゴー作　思軒居士譯

死刑を宣告されたる罪人が其死刑前六時間に於ける苦痛、煩悶、悔悟、其他彼が胸中のあらゆる苦悶を寫せしもの、原作固より傑、而して譯するに居士の筆を以てす、其非凡絶類贊せずして知るべし。

みぢか夜　川上眉山人

紳士あり彼が位置權力等の進むに從ひ自然其糟糠の妻を嫌ひ、妻は紳士の未だ志を得ざる時と同じく、故に愛情を注げど、彼は遂に離姻すと云ふ離姻小說也。

わすれ水　田山花袋

妙齡の男女あり、互に相思へども、遂に互に愛情を通ずる能はずして、男は愛せざる妻を娶り、女は好まざる男に從ひ、十五年の後計らず邂逅し、互に運命のはかなきを喞つと云ふ悲哀小說なり。

空行く月　花圃女史

發行所　民友社

東京々橋區日吉町四番地

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行